

「山の奥」

「山の奥は判つてゐるさ。どの邊だね」

彼が斯う尋ねると、女は、はたと黙つてしまつた。急に言葉が途切れたので、彼はびつくりして女の顔を見た。その時、女の眼には白いものが宿つて光つてゐた。彼は、意外だつた。それで、妙にまごついて、眼を外らして言葉をかけずに盃をぐいと飲んだ。

「信州へ歸りたい。……信州はお盆の近くで、いま踊の稽古に、皆が忙しかろ」

かう云つた女の言葉は、全くの獨り言であつた。前にゐるお客様も何も眼中には映らなかつた。

「信州の山の奥のお盆は賑かだらう。盆踊は今でもやるのかい」

「え、毎年やります。それはく／＼賑かでく／＼」

女は幻影を逐ふやうに、うつとりとして庭を眺めた。

「盆踊つて、信州なら、やつぱり木曾の御嶽山だらう。裕やりたや足袋そへてか」

「え、それですけれど、伊那節ですから、木曾のとはちがふでせう。よくは知りません

「一つ踊つて見せないか」

「まア私が」

「踊る前に、唄つてこらん」

「まア」

びつくりした女の眼付を見て、彼は思はず吹き出した。

それからしばらく黙つてゐたが、女は一寸考へるやうな風をして、やがて急に勢よく話し出した。

「わたしの村のお盆は、それはく／＼賑かです。何十人も集つて、若衆と娘とが入り交じつてお宮で踊りを始めるんです。夜が明けるまで、それはく／＼面白いんです。まアるくなつて踊るんです。みんなお化粧をして、襷をかけて、若衆達も揃ひの浴衣ゆかたを着ます」

女は口早やに斯う云ひかけて、又一寸言葉を切つたが、彼が出す盃につきながら、

「その代り恐ろしいこともあります」

「どんなことだ、恐ろしいといふのは」

「盆の踊の晩に、若衆が何人も集つて、ふだんから思つてゐる娘を昇いで暗い淋しいところへ連れて行つて、ひどいことをするのです」

「娘の方だつていやぢやアないんだらう」

「いやですとも、娘の方で、好いた若衆なら、はじめからそんな荒いことをしないで、二人でどこへか行きますもの」

女は元氣のよい眼で、無雜作に彼の顔を見た。

「きみも、昇がれた口か」

「まア、いやだ」

「それとも、二人でどこかへ行つた方か」

「知りません」

女は、急に取りすました子供らしくない姿になつて、横を向いて庭を眺めた。

「信州のね、盆踊の唄を教へてあげませう。あとでね、ゆつくりと」

「踊もたのむぜ」

「えゝ。踊も」

丁度、その時、飯もすんだので、女は膳を下げて下へ行つた。

しばらくすると女は勢よく廊下を走るやうにしてやつてきた。

「さア、唄ひませう、信州の唄を」

酔つてゐる彼は、手を敲いて歓迎した。先刻の分別臭い顔も様子も、どこかへすつかり振り落してきた女は彼のすぐ前に、きちんと坐つた。

「きみは、いつ信州を出たんだね」

「去年の冬、雪のふかい日に逃げて來ました」

「雪のふる日に逃げたつて、それは、自分の家をか」

「えゝ。お祖母さんには、すまなかつたけれども……お祖母さんは、今でもさぞ私を案じてゐてくれるでせう。……悲しくなりますわ」

彼は女の眼を見た。けれど昨夜のやうに白いものは光らなかつた。

「ちよいと、これを貸して下さう」

女は、彼の横にあつた扇子をとつた。擴げて胸へあてるやうにすると、大きく圓を描いてくるりと又それを元の位置に持つてきた。彼が、その手付をちつと見てゐるのに氣がつくと、女はほつと赤くなつた。

「これは踊の手です。ほんたうは立つて踊るんですけど……」

彼は、うなづいた。

へ遙か向ふの赤石山に、ソリヤ、雪が見えます雪が見えます初雪が、ヨサコイ、アバヨ
低い聲だが、はつきりと節をつけて女は無雑作に唄った。

「うまゝね」

「うまくはないけれど、かう云ふ唄です」

「もつと唄つてごらん」

彼は太陽氣になつた。

「え、いくつでも唄ひます。……誰か他の人が聞いてると嫌だけれど」

と云つて女は立ち上つて廊下へ出て、あたりを見廻した。

「大丈夫々々々、誰も居ませんよ」

と女は再び元のところへくると、今度は立つたまゝ唄つて踊りはじめた。

へみをのひかげも西野の奥も、ソリヤ、住めば都で住めば都で花がさく、ヨサコイ、アバヨ
それから三つ四つ、新しいのを唄つて、扇子を持つ手をうごかし、ぐるりと一廻り座
敷を一人で面白さうに踊つた。

三二

彼は寢床の上どころがたまゝ、風を涼しがつて、ぼんやり庭の方を眺めてゐた。

ことごとく割合に静かな足音がすると思つたら、お藤が、元氣よく笑ひながら又やつて
きた。

「オヤ、もうおやすみになりますの」

「また、踊つてくれるのかね」

「もう、踊りません」

女は、何時の間にか派手な浴衣に着かへてゐた。

「今夜も静かで、こゝともう一つあるきりです。あとは向うのお座敷で、藝者を呼んで
こゝの銀行の人が遊んでゐるきりです」

彼は銀杏返しの水々しい髪をして派手な浴衣をきてゐるこの女が、一年と経たぬ前まで
信州の山奥に住んでゐたといふことを此時ふと疑ひ始めた。

「信州を雪の中から逃げたつて云つたね」

「え、」

「去年の冬かい」

「え、」

「眞實かね」

「まア」

女は、かう叫ぶやうに云つて彼を見た。その眼には明かに彼に對する激しい輕侮が光つてゐた。

彼ははつと思つた。

「悪かつた、疑つたのは悪かつた」

かう云ふと女も亦無雜作にその輕侮を取り消した。そして子供つばい顔になつた。

「雪の中をなぜ逃げたのだね」

「わけがあつて」

「どういふ理由だね」

「お話しても、疑ふから駄目です」

「もう大丈夫だ」

「その逃げた理由は、私が逃げれば、その家には親類から、聲が来るんです。私が居ると、私のために其人に跡を取らせることが出来ないんです、だから、私は逃げて親類の人を跡へ入れるやうにしたんです」

彼は女の斯う話すことの筋道がどうも好く飲み込めなかつた。然し詮索するまでもないと思つて黙つて點頭いて居た。

「わたしは、七つの時から信州へ貰はれて行つてゐました。お祖母さんと、お祖父さんだけの家です。お祖母さんは、わたしを可愛がつてくれました。ですけれどお祖父さんは私に跡をつがせるよりは、親類の人を入れたがつたから、家がごたく／＼して困つてしまつたんです」

少し判つてきたやうだと彼は思ひながら、相かはらずうなづいた。

「雪の降つてゐる夕方でした。お湯を貰ひに近所へ行く風をして、一人でこつそり逃げ出したんです。虫が知らせたのか、お祖母さんは、その日は朝からいつもより餘計に私を可愛がつてくれました。いゝお祖母さんで、わたしはお祖母さんにほんたうにすまない

ことをしたんです」

女は、いきなり浴衣の袖で眼を拭いた。彼は女の泣くのを見て、少しからだを起した。

「雪が積つて、寒い晩でした。わたしは夢中で馳けました。両側には山が見えます。その間の道逃げたのです。三里ばかりくると宿屋のある村がありますから、そこまできて泊まりました」

彼は肚の中で又疑を挿んだ、こいつめ、俺をからかつて面白がつてゐるのではないだろうか、映畫の筋か何かを覚えて居て……と。

「途中で、つかまると思つて、一三度うしろから人がくると道から横へかくれたりしました。翌日のお午頃に電車のあるところへ着きました。そこまではお祖父さんと前に一度来たことがありますし、心配だつたけれど、それでも困らずに逃げられました」

女はすらくと涙みなく話して、そして此の時ほつと一息した。

「それから、ほんたうの私の生れた家へ歸ると又つかまつて面倒が出来るといけないと思つて、人にたのんでこゝへきて奉公するやうになつたのです」
一寸黙つて疊の上を見てゐたが、又涙を拭いて、

「お祖母さんは、私の逃げたあと、まるで病人のやうになつてしまつたといふのです」

とかう云ひ終ると共に、急にすゝりなき始めた。彼は女の髪ふるふるのを見て疑つた自分の輕卒を再び悔いた。

「では、こゝに居ることは、信州へも知れたんだね」

「えゝ、つい先日知れたんです。知つてゐる人のところへ私から手紙を出したものですから」

彼は、この時、女を周る山中の青年達を頭へ浮べた。先刻聞いた盆踊の夜のことなどもすぐ考へ出された。

「おやすみなさいまし」

しばらくしてから、女が元氣な顔になつて斯う云つた。

「もう行くの」

「えゝ」

「明日の晩、又盆踊の唄を聞かせてくれるんだよ。いゝか」

「えゝ、きつと唄ひます、きつと……」

女は、ふりむいて、勢よく笑つた。そして銀杏返し、白い手、浴衣、それ等を彼の眼へまざくと残してこの室を去つた。

彼は、幾分の疑ひと、大部分の興味とを以て、この女の語るところを、旅の慰みに只面白く聞いた居た自分の輕薄を省て恥ぢた。

——本篇は、これだけでは纏つてゐない、と云ふ人がある。然し後は書かない方がいゝ——。

顔

洋服の上着を、柱の釘からはづして手に持つと、それがいつもよりは、どつしりと大それたおもく思はれた。けれど、ポケットに何か入れてあると、すいぶんおもいこともあるから、べつにそれに氣はとめなかつた。

袖へ、手を片方入れようとしたとき、ばたんと音がして、疊の上へ、物が落ちた。下を見てぎよつとした。大きな山かがしである。

山かがしは、疊へ落ちると鎌首をあげて、ねめながらざらざらと音を立て、たゞみのうへを、出入口の方へ這ひ出した。それを見送つて、からだ中の毛が一度に立つた。手に洋服をつかんだまゝ蛇の這つてゆくのを、どうもせず許してゐた。

蛇は、出入口のところの板敷から、きうにくねくと波のやうに動いて、地へ滑べつた。そして、またくまに軒したへ出ると、横へまがつて、人の眼から離れた。

なにか手頃の棒でもないかと、そのときになつて、あたりを見廻したが、あいにく何もなかつた。唯、ゐろりの灰のなかに細い木の枝が二三本ころけてゐたが、それは、皆まつてゐて蛇を撃つにはわるい形ちであつた。それで、戸外五六歩のところから山裾へつづくみどり濃い草むらへ、蛇がかくれてしまつた頃、はじめて、こんどは、自身の物でありながら、よそ／＼しく洋服を見守つた。なるほど、それは餘程かるくなつてゐる。でもまだもう一疋どこかにもぐり込んでゐるらしく思へて、俄かにまた、ぞつとしたが、丁寧に恐わ／＼うらおもてをしらべてみた。

一たい、どういふわけで、蛇なんぞもぐりこんでゐたらう。筒形になつてゐるから、袖のなかへもぐり込んで寝てゐたものとして、それが果してふしぎはないだらうか。

暑い日中は、物蔭を求めて涼をとり、谷川や、木立の深い泉のほとりに、長々としてゐるのが多いから、それと同じつもりで、此の小屋へきて、天井傳ひに柱へさがり、黒つばい洋服を、朽木の皮か何かのこゝろで、中へ這ひこんだ、と考へればそれもまとまつた考である。そのほかにはどういふ考をつけてみようか――

洋服は、こゝへゆふべかけたまゝで、けさは上着なしで外へ出たし、ひるめしの時、吉

造と常二郎と三人でこゝへ歸り、ふたりは一足さき以上の現場へのぼつて行つた。そのあとに、わたしがただひとり一ぶくして、これから下の仕事場の事務所へ行くために、上着をひっかけようとしたときだつた。――

天井を仰いで見ると、うすぐろい煤ぼつた板のところ／＼に、ふら／＼と長い繩切れが二三本つるさがつてゐるのは、何かを懸けておく繩なのだ、柱を見ると、これは丸太を荒けづりにした頑丈なもので今かけてあつた五寸釘が、いかつく出つばつてゐる。あすこから天井の横をきて、それから柱へとわたつたとすれば、何の不思議もないことになる。

かう考へたら、心がさらりと晴れたので、洋服を持ちあげ着ようとする、妙な氣持がしうねく一向うすらぎもせず、そこにはびこつてゐるのを見た。――蛇が、天井を傳つたりするのは、山のなかの生活にありふれたことだが、それが、釘にかけてあると、だらりと布のやうになつて下つてゐる洋服の袖のなかへ、巧みに這ひこんだまゝ、手にとつてもすぐ、する／＼と滑べらずに、それを着ようとして、はじめて、たゞみへばたりと落ちたのだ。と、それを、又考へ出した。――一寸、又考へ沈んだが、しかし、すぐに外出のことを思ひだして、その洋服へ手を通さうとして、襟のところを両手でつまみ、自身の顔の

前へ持つてきた。それで、つと顔を寄せて、にほひを嗅いだ。

別段、なにのにほひも残つてゐない。汗くさい自身のにほひが、此の場合、ただなつかしいだけであつた。

安心して、手を袖へ入れかけた。

そのとき、不意にわたしのこゝろにはつきりと、いやなものを見た。それは、顔である。どす黒い、平べたい顔で、眼が妙に白くひかつた。

ふた月ほど前に、こゝの受持を去つて、本社詰めになるとき、あとへ入れ代りに来たわたしに、此の柱の前に立つて、事務所番のひとり娘のことを、かんたんだが誹謗した。わたしが返事のしようもなく、詮方なしにうすわらひをすると、きうに黙つて、じいつと妙な上眼を使つてこちらを見据ゑた後、にやりと淋しく笑ひ出した。その時の、あいつの顔が、この咄嗟に、わたしの前に、はつきりとあらはれたのである。

親切

鰻賣の吉藏が、重い天秤棒の荷をおろして、ほつと一息入れたとき、陽はもうだいぶん西の方へ廻つてゐた。

吉藏は峠の茶店で、少し喋舌りすぎて、思ひの外に時を過した。豊橋の薬屋で買つてきてくれと頼まれた血の道のくすりを、天秤棒にしつかと結びつけておいた風呂敷包からとり出して、吉藏は茶屋のおかみさんに手渡した。おかみさんは相かはらずつまらなさうな顔をして、ぼんやり圍爐のところになすわつてゐた。この暑いさかりの夏でも、おかみさんはいつも圍爐のわきにどさりと座つて動かない。吉藏の買つてきてくれた薬をうけとつてその紙袋の畫を眺めながら、それでも少しは笑顔を見せて低い聲で禮を云つた。

吉藏は、こゝでその薬の利目のあることを話のいとぐちにして、薬屋の店の大きいこと、豊橋の町の賑ひ、高師原の遊廓の様子、どこかの辻に強盗が出たこと、あれ、これ、そ

れと古い話新しい話をとりまぜて喋舌つてしやべり捲くつて、それでやつと、清々したといふ顔になつた。

土用鰻を信州の飯田まで、豊橋から三十何里の山道を、兩方の大畚へ一杯に詰めこんで毎年書入れの錢儲けに大汗をかいて彼は走るのだ。すいぶん急な山道もある。木蔭一つない平地もある。然し吉藏はところ／＼の茶屋や知り合ひの家へ立ち寄つて、一ぶくやるとき、喋舌り捲くることを何よりのたのしみに、暑さもあまり苦にはせず、天秤棒にはづみを付けて、朝は未明から、夜は暗くなるまで歩くといふよりは、半分馳けて行くのだ。

歸りの空荷には、飯田在から出る山のを何と定めず、その時の都合で安く仕入れ込んで豊橋へ引き返へす、歸りには往きの三日の旅を五日もかゝつて、ゆつくりとあるいて来る。往きにかかけつけた埋め合せに、歸りは十分油を賣るのが癖になつてゐる。そのくせ荷は往きかけの半分の重量もないのが常であつた。

オヤ／＼日が大ぶん廻つたぞ、こいつは、ちつと急がねえと眞暗になつてしまふぞと、吉藏は前とうしろの畚を見較べるやうに首を振つて、どつこいしよと一番肩を替へる。

街道筋は、どうしたことか今日は一向に人も馬も通らない。朝からの暑さで道端の草は

萎えてゐる。

畚の中の鰻は、ぬら／＼とぬめりながら、まきついてゐるんだらう、吉藏の脚が早くなるにつれて畚は激しく動いても中は一向静まり返つて、只なま白い泡が牛の涎のやうに畚の目からとき／＼出てくる計りだ。そしてそれが、どうかすると、だら／＼と地の上を糸のやうに引いて行つた。

これから、もう一つ三里あまり峠を上り下りすると、そこが、吉藏の今夜の泊りだ。道は嶮岨ではないが。暗くなつて着くと、翌日が難儀だ、今日は茶店にゆつくり居過ぎた、と吉藏は行く手の峠を見ながら、肚の中でつぶやいた。

谷川の水は、涼しい音を立てゝゐるが吉藏は暑くて堪らぬ。夕日が強く杉の梢に光つてゐる道を側目もふらず、ときをり肩を替へては、荷をはづまして馳けてゆく。

峠の半ばまで来た頃は、あたりがだいぶん夕暗になつてゐた。くね／＼と曲る道の杉の木の下を、息をはづませて上つてゆく。吉藏は其の時は、つと紅いものが眼に映つたと思つた。彼は不意のことにびつくりして目を丸くした。

紅いものは、帯だつた。十六七の娘が唯一人、道端に蒼白い顔をして、うづくまるやう

になつて憩んでゐる。吉藏は足をとめて息杖を天秤棒に當てがつた。

娘の方でもびつくりした。今まで眼を閉ちてうづくまつてゐたところへ、急に足音がしたと思ふと、そこに荷を昇いだ大きな男が突つたつてゐるので、おどろいた眼を上げて吉藏を見た、が、すぐ又くたびれたやうに、首を垂れてじつと地面を眺めてゐる。

娘の此の様子を見た吉藏は、これは只事ではないぞと、とり敢へず、娘の側へたちよつた。娘は、信州飯田在から、三河豊橋在の製糸工場へ出稼にきてゐたが、脚氣で郷里へ今かへる途中なのだ。

ヤレヤレうなぎ賣の吉藏は、到頭今夜は、まだ餘程暗くならなくては、宿屋へ着かれな
いことになつてしまつた。

茶の味

嬬の奴、あんなに、頭をびよこくやつてるが。一體、誰れが來やつたんだ。おほかた、事務所の禿かどぜうが、炭木の値積りに來やつたんだらう。……炭木の値積りは一昨日やつて行きやつたんだつけない。ちやア、禿やどぜうでなくて、軍曹か小林さんかも知れねえが。

オヤ嬬め、箒を持ち出して、塵の上を掃いたりしてゐやがる。どうするんだ。ひとりまごつく何を周章くさつてゐやがるんだらう。俺が、今この峰の小徑で一ぶくやつてるのを知らねえから面白いんだ。

一とツ走り、この山のどてツばらをかけておりて行きやつた俺の小屋まで雑作もねえが。

まアめんどうくせえ、こゝで高見の見物つてえところだ。……あの山の出ツ鼻が邪魔になつて、向うから来る奴はまだちつとも見えねえ、こゝからは、やつと俺の小屋が見えるだけだ、炭の積場の方はこの栃の木のおかげで半分しか見えねえんだ。

202

アレ、嬢め、吉松を叱りとばしてゐやがるな。吉松が飛んで出てきやがった。やあ窯場の方へ行つちまつた。べそを搔えてゐやがるにちげえねえ。嬢め、なんだつて、坊主を叱るんだ。

誰れかが、俺の小屋へやつてくるんで、嬢がそれで坊主を外へ出したり、箒をふり廻したりしやがるんだな。一體どんな奴がくるんだらう。……ひとツ走り行つてやらうか。……わけはねえが、馬鹿々々しいから、まアくやめて、こゝからもうちつと見物してゐよう。

あッ、嬢のやつ、小屋を出たな。雞がびつくりして馳け込んだな裏の方へ。……やア

来たぞ〜、洋服だ。……見たことのねえ奴らしいぞ。おヤ、来た〜三人四人……ヤア禿も、ちやんちきちんも、河童も、軍曹もついてきやがったぞ。事務所の偉さうな奴、みんな、總出だぞ。オヤ嬢がべこ〜又みんなの尻の方でやつてやがる。軍曹だな、あれは。嬢に何か云つてるのは。オヤ、見馴れねえ洋服が、腰をかけやがった。あ、二人共かけやがった。禿が帽子をぬいだな。禿をまる出しにしやがった。方々指さして何だか云つてやがるんだらう。洋服の奴に何か話してゐやがるんだらう。

あ、村のさあべるが一番あとから出てきやがった。こないだ、事務所の前でひよつくり出あつたとき、オイ、賽ころはいけねえぞつて、いやな眼をしやがった。官林の方へ這入つてる越前者が、村の松村屋でちよぼ一をやつて眼をむかれたつて話をきいたが、それで野郎、俺達までいやにぎよろ〜見やがるんだらう。あ、さあべるが、洋服の前へきて片手を上げて失敬をやつてるぞ。……一體なんだ、あの洋服のちびは、あいつは俺よかよつぼどちいせいやうだぞ。オヤ嬢が見えなくなつたぞ、どこへ引つ込んでしまやがたらう、のんきな奴だ。あんなにえらさうな奴が押しかけてきやがったに。……俺一とツ走り行つ

203

てやるのはわけねえが、あいつらの前で、べこつくことは大きらいだし、そのうへ、吃つてろくに物が云へねえから、まア、やめて高いところでもうすこし見物してゐよう。なにも悪いことをしたこたアなし、ちつとも構ふこたアねえんだ。……あとで嬢にきけば、すつかりわけは判ることだ。……オヤ、嬢の奴、お茶を持ってきたな、湯をわかしてゐたのか。嬢のやつ、俺よりは話が上手だが、女のことだ。すいぶんめん喰つて、弱つてゐるだらうなア。可哀さうだ。俺、吃つても構はねえ、一とツ走りこの山をかけおりて行つてやらうか。脊負子と鉈や道具はこゝへおいて身軽になつて飛べばわけはねえが。……まア、もうちつと様子を見てゐてやれ……

「君、仲々、理想的に、炭窯の位置が配置されてゐるね。今年の伐木地域は、あの斜面からこれへかけてかね」

「はい、大體、窯の位置は材積に應じて配置してあります。今年はその峰から下方の區域であります」

「お茶を一ついかがですか。……どうも、歩ると暑いので喉が乾きますから、さア、どうぞ、お茶を」

「やア、……では、一杯、貰はう」

「さア、貴方も」

「やア」

「これは、どうも、……非常にいゝ茶だ、實に上等品だね。……我々の家庭では、とても用ひない位な品だ、玉露だよ、君……」

「はア、成る程左様です、まつたく、上等です。こんな炭焼小屋に、こんな茶があると驚くべきことです」

「えゝ……一體に山の中の労働者は、お茶はいゝ品を用ひます。わざわざ玉露など取りよせて飲むのが澤山あります。はい、この事業所全體に互りましてすべて、どうも労働者は茶の上等品を用ひます」

「不思議の習慣だね、どういふわけか知らんが、労働者が茶を吟味して使ふといふのは、この邊だけの習慣だらうが意外だね、山本君」

「はい、さやうで、如何にも意外で」

あゝ、茶をのんだら、みんな、ぞろ／＼又立ちやがつた。俺の小屋の前を通つて上へのぼつてゆくな。官林へ行くのかも知れねえ。あゝ嬢のやつ、又、みんなの尻に向つて、べこ／＼お辭儀をしてゐやがる。暑いと見えて、嬢のやつ、手ぬぐひで顔を拭いてゐやがる。可愛さうにひとりでくれたんだらう。……一とツ走り小屋まで飛んで行つてやらう。

わたりもの

一

汽車が、金ヶ崎といふ停車場を出る頃に、日は殆んど暮れてゐた。

この列車は、一の關行であるから、盛岡附近では仲々込み合つてゐたが、この邊へくるまでに乗客は大方降りて、車内は僅か六人になつた。

向の隅の窓に靠れかゝつて心地好げに寝入つてゐる行商人らしい色眼鏡をかけた男と、私の椅子から四つ目の同じ側に、向ひ合ひに腰をかけてゐる黒絹の羽織を着た老人と、御所緋の單衣に兵兒帯をまきつけた學生風の青年と、それから私のすぐうしろの、二人連れの百姓と是れだけである。

老人と學生とは親子らしく、何やら時々話をしてゐる。二人連れの百姓は、私が今朝、

浅蟲で乗車した時既に乗つてゐたので、今では此の車内一番の古顔である。青森から乗込んださうで、仙臺まで用達しに出かけるのだが、今夜は一泊して、明朝一番で正午前に仙臺に行きたいと云つてゐる。一人は眼の細い、額の突き出た、頬にムシヤ／＼髯の延びた大男で、一人はそれよりは少し年の若い、四十一二の顔の四角い鼻の頗る大きな男である。二人とも屈強なからだに、鼠色のこまかい縞の單衣を、不作法に着て、その裾を膝頭まで捲くりあげてゐる、晝のうちには、二人は車内の暑さを大に持てあましてゐた。私は初めは此の二人の隣に腰をかけてゐたが、三つ四つ前の驛で夕日が差し込んできたから、空いてゐた今の椅子に移つたのだ。私はいつとはなしに二言三言話をまじへて、この二人は百姓の片手間には材木の方もやつてゐるといふことを知つた。

私は、金ヶ崎を過ぎてからは、窓の外も暗くなつたので、退屈しのぎに此の二人に向つてしきりに話を持ちかけて、いろ／＼のことを聞いた。顔の四角い方は仲々話好きであつたから、すぐ喜んで私の相手になつた。青森の羅漢柏の天然林の廣大なこと、その大森林を東から西へ横断する森林鐵道が、この二三年のうちには完成すること、さうなつた曉には津輕半島の中中部も大層開けてくるだらうと思はれること、林檎の栽培が金になること、

それから冬になつて雪の降り積んだ後の生活の模様などは、殊に力を入れて話した。

私は、自分が企てた此の度の山林視察旅行のうちで青森の羅漢柏林は豫ねて描いてきた豫想よりも淋しかつたこと、樹木の小さかつたことなどを語つて、次に其の地方に有名な森林窃盜の話をしてくれと望んでみた。

二人は、一寸顔を見合せたが、今度は珍しく髯の方が口を開いて、重々しい例の蟹音で、次のやうなことを話してくれた。

森林窃盜はこの三四年來監督が十分なので、目立つて減じてきたが、昔は仲々大仕掛けで、大びらにやつたものだ、十數人といふ人數が隊を組んで、幾日か山ごもりの準備をして、伐りに入つた。一體官林を盜伐することは、左程の悪事とは思はぬ傾きがある、勿論民家へ忍び込んで外の品物を窃盜するとは、全く譯がちがふと云ふやうな心持でゐたのは昔からの事だ。然し此の盜伐をやりやく連中は、よく／＼の亂暴者や命知らずが多いから、時には話にならぬ恐ろしいことを仕出かすことがある、餘程前のことであるが、夜半俄かに襲撃して、山林内に在る保護官舎を焼き捨て、しまつた。それも官舎の錠を外からかけて、内に保護吏家族を入れたまゝ、火をつけたので、豫ねて腕利きの評判のあつた保護

吏は、その最愛の妻と共に、命からかくやつと逃げ出したのであつた。それから又斯云うことも聞いた、巡回の役人の一隊と、窃盗隊とが計らず森林内で出遇つて、しばらく格闘の末、衆寡敵せず役人は散々に追ひ立てられて、命からかく或る場所まで引き上げた。その時怪我をして生捕になつた役人の一人は、窃盗隊のために木の枝へ吊されて、生葉燻しのひどい目にあはされて、翌日蟲の息で逃げ歸つてきた。之れ等の亂暴な話は近頃は殆ど耳にせぬ、官の手も十分に廻つてきたし、人民の方もそれくお互に戒めるやうな風になつたからであらうと、髯は話を結んだ。例の訛が多いのと、汽車のひびきとで、ところく意味の取れぬ箇所もあつたが、私は其の訛澤山な話振に、云はれぬ面白味を覺えた。

北津輕の海岸に近い所に四百五十町歩程の、牧場に持つてこいといふ平坦な野原の賣物があるが旦那は山林の方をやつておいでのやうだから、自然又何かの序に好い買手があつたら、世話をしてくださいと、四角い方が横合から云ひ出した。髯の方も、しきりに、其の地が牧場に適して、それで馬鹿に安いだから、大仕掛けでやつて見る人に賣りたいものだと言つて、くりかへしく草の種類の多いのと、草の量の豊かなことを吹聴してゐた。

汽車は平泉についた。私は鞆を棚から下ろして、洋傘を手に、車を出た。

お大事に氣をつけておいでなさいと、二人は窓から四角い顔と、髯の顔とを突き出して、口を揃へて云つてくれた。

二

平泉で降りたのは、私が一人である。

汽車が通り過ぎるのを待つて、ブラットホームから飛び下りて線路を横ぎり、向側のホームにあがり、改札口を出て、鞆をかへた儘二三歩あるき出すと、後から驛夫が、

「すぐ此の向に宿屋がありますよ」

と教へてくれた。そこで私は向に見える灯を目當てに暗い道を急いだ。

宿屋は二階造りの、思つたよりは大きな家である。入口の障子をあけて中へはひる。と二三人店先に寝ころんでゐた男女が起きあがつて、驚いたやうな聲で、お客様だ、いらッしやい、さアお上りくださいと云つた。

店先きの一間に大きな蚊帳が吊つてあつて、中に一人の男が大の字になつて高軒をかいてゐる。私はその蚊帳のわきから上つて、女に導かれて二階へ通る。ぐらく動く梯子段

であつた。女は鞆を持つて先に立ち、私を街道に面した部屋に連れて行つた。

その時、二階の上り口に向つた部屋を、通りぬけながら何気なく見ると、部屋一杯に膳部が三十人前程、行儀よく並べてある。今にもすぐ、宴會が始まるらしい體裁だ。女が私を案内した部屋は、襖一重で、此の廣間につゞくのであつた。

「オイ、姐さん、何か宴會でもあるんだね、遅くまで騒がれると、寝付かれないで弱るから、どこか少し離れた部屋にしてくれないか」

と云つてみた。

「はい、寄合がありますけれど、そんなに騒ぐんぢやがあせん、ぢや、こつちにして上げませう」

と、又逆もどりをして、宴會の間から一間隔てた裏の部屋に通した、こゝは六疊で西向らしう。

女は障子を左右に明けひろげて、さつさと下へおりて行つた。琉球表の疊は、うす黒く汚れてゐる。道で一寸見たときは、可なり大きい家のやうに思つたが之れは鐵道が開けて後出来たらしい極めて粗雑な假普請のやうな建物であつた。今夜は泊客は、私一人だけで

あらう。

女が上つてきて、茶を注いでくれる。

「旦那は、何處から來なさりしたね」

「青森の方から、やつてきた」

「中尊寺に御參詣しなさりすかね」

「さうだ、中尊寺を見物しようと思つて一寸立寄つたのさ」

私は時計を出して見ると八時三十五分である。

「お湯におはひんなつて」

「あゝ、はひるよ」

私は洋服を浴衣に代へて、女に導かれて、雪隠のわきの五右衛門風呂にはひる。臺所の方は何やら、混雜してゐる。私はうす暗い風呂桶の中で、顔にたかる蚊を手で追ひながら、この淋しい村の宿屋で、今夜、之れから開かれる宴會は、一體何の催しだらうかと思ひ廻はす。

風呂をすまして私は膳に向ふ。北上川で捕つたといふ鰻の蒲焼と、鮎の煮たのと卵汁で

ある。

漬物には細い固たさうな澤庵が二切れ付けてある。

「今夜の宴會は、何があるんだね。村役場の相談でもあるのかい」

と訊ねてみる。給仕にきてゐるのは、最前の女ではない、緒ら顔の目の腫れぼつたい女であつた。

「お嫁入があります」

「お嫁入りだ。ヤア、それはお目出度いな。お嫁入りかい」

「はい」

「どこの人がお嫁を貰ふんだね」

「自家に泊つてゐる製板場の職工さんのところにくるんです」

ブン／＼唸つて大きな蛾が三羽、外から舞ひ込んできて、ぱつ、ぱつと洋燈へ飛び付いた。

「どうも障子をあげると、蟲がへえりましてな」

と、女は氣の毒さうに云ひながら、ランプを見上げた。

「この家に下宿してゐる職工が嫁を貰ふのか、それは結構だ、お嫁さんは何處の人だね」

一本の徳利は既に盡きた、私は茶碗を出して、飯を盛りせる。

「お嫁さんは此の村でさア、兄弟が多いし、おとツさまが年寄りだから、氣がせいて急に話が纏つたんでござりんす、ことし十八になりました」

「お婿さんは」

「二十九があせう、この人ぢやがあせん埼玉縣の人だつて申しやしてね、去年この村にやつてきてな。製板に出るので、此家に下宿してゐなさんで、方々旅をしていろいろな事やつてきた人ですがすから、おもしろい人ですがすよ」

「さうかい」

女は、しきりに嫁さんの、まだから、きし子供で、あんな苦勞をしてきた人の女房になつて、始めのうちは仲々骨が折れるだらうと云つて私の同情を求めた。

そして、この縁談は、男の方から、手きびしく持ちかけた話だと云ひかけたが、どう思つたか急に元氣な調子で、

「旦那、今にお嫁さんがおいでなすから、そつとこの襖の間から覗いてお見なされ、それは一向子供々々したお嫁ツ子があすぜ」

と、笑ひながら、女は膳を下げに階子を下りていった。

私は腹道になつて日記をつける。今夜は知らぬ間にひどく酔つた。誠に好い心持ちである。私は小便に二階を下りた。厠は家の外にある。晴れ切つた大空に星がきらめいて、涼しい風が頬を吹く。私は熱した顔を風に吹かせながら、ぶら／＼と其の邊を少しあるいて又部屋へ戻つた。蚊帳が吊つてあつたので、書きかけの日記は明朝かくことにして、そのまま寝床へもぐり込んだ。

三

一寝入りして眼をさましたら、折から向うの座敷の宴會は今がさかりであつた。

三々九度も滞りなくすんだと見えて、今は呼ばれてきたお客の人達が大聲で、唄ひ合つてゐるところらしく、仲々賑かである。「オイトコさうだよ、紺の暖簾に伊勢屋と書いてだんよ」と唄つてゐるのは、年寄りらしいが、花やかな若々しい聲だ。それがすむと、「相馬／＼と木萱もうなアびくなアナンだね」と、相馬節をやりだしたのは、二十代の男であらう。

「さア／＼皆さん、シ、ヨ、ン、が、い、な、を、一、つ」

と金切聲をふり上げて發議したのは、正しく四十女の聲と思はれる。

私は時計を枕許に引きよせて見ると、既に二時に近い。

ふと気が付くと、私の寝てゐる隣間に、ひそ／＼と話聲がする。向うの騒々しい聲に消されてよくはわからぬ。

おとツさん、わたし暑くて、苦しい、くるしい、どうも暑い／＼と、子供らしい女の聲がする。

さうか、そりやのぼせたんだ、今になほるよ、少しがまんして、な、さア向うへ行つて、な、もうぢきお開きになるんだから、と之れは年寄つた男の聲だ。お前、襟をなほして、さ、手ぬぐひで、汗をふいて、それ、まア汗が……といふ聲は別の女だ。扇子であふぎ立てる音も聞える

成る程。蒸し暑い晩になつた。私は目が冴えて、すぐには寝入れなかつた。

四

六時少し前に眼がさめた。顔を洗ひに階子段を下りる。水で全身をぬぐつて、例の通り深呼吸をやつた後一寸近所を眺め廻した。

宿のすぐ側に大きな水溜がある。水はあまり綺麗ではないが、岸に葭がところ／＼に生えてゐる。この池の向側は停車場の荷揚場で、機械挽の四分板が、平積みになつて高く、幾箇所にか積んである。掛聲をあげて男が三人孤包を貨車に積み込んでゐる。停車場の向うには、遙かに北上山脈が、屏風のやうに連つてゐる。多くは松林で、ところ／＼に杉も見える。谷間々々にほんのりと霧のやうな雲が棚引いてゐる。

宿の軒で雀が鳴いた。私は濡手拭で、頭を擦りながら内へはひつて、二階へあがりかけると、出遇ひがしらに上からも一人下りてきた。

私は何気なく見上げると、下りかけてきたのは昨夜の花嫁らしい。

花嫁は、はつと驚いて周章あわてて後へ引きかへした。

私は少しまごついたが、その儘階子を上り切る。と花嫁は階子段のわきに立つて私の上り切るのを待つてゐた。

念入りに結びあげた高島田は、少し亂れて、ほつれ毛さへ頬に掛る。横向きに顔を反ら

してゐるから、その豊かな片頬が私の目に止まる。白粉の濃化粧が、肥えた襟のあたりに白く、絞りの寝まきに桃色の細いしごきを巻いた姿は、どうしても十五六にしか見えぬ。私が部屋にはひると、すれちがひに階子段を下りて行つた。

五

中尊寺まで、宿から往復一里はある、金色堂の案内に坊主が待たせたのと、繪葉書を買ふ時、数が揃はなかつたため、手間どれたので、中尊寺の坂を下り切つて黒門を出たら、時計は九時少し前になつてゐた。十時六分の汽車に遅れては困ると、大急ぎで宿へ歸る。宿の店先きに男が二人、長々と横になつて、話をしてゐる。一人は昨夜この店先に寝てゐた五十恰好の男で、他の一人は散髪を、額の前だけ長く延ばして、斜に櫛の目を入れた色の浅黒い中肉中脊の若者であつた。大柄な單衣をしだらなく着て、絞の兵兒帯を腰に巻きつけてゐる。爺は腹ばひになつて煙管をひねくり、若者は仰向けになつて、まき煙草の煙を鼻から出してゐた。

私は二階に上つて、荷物を片付けにかゝる。宿の女が茶盆を持つてきて、私のわきに置

く。繪はがきのかはつたのがありますが、どうか買つて下さいといつて、女は手にしてきたのを十枚程、ずらりと疊の上へ並べる。

見れば、成程、寺で賣つてゐたのと違ふ種類も、二三枚あつた。發車までには十五六分あるから、まづ安心と腰を据ゑて、それを手に取り上げた。寺で買つたのに較べると、金色堂の七寶の柱や、一字金輪佛の寫眞は珍らしい出来であつた。

「おうめさん、こつちさ、おんでよ」

女が突然うしろを向いて云つた。見ると向うの部屋の窓のところに、庇髪に結つた十五六の少女が一人立つて、こちらを眺めてゐた。

「や、おうめさん、や、や」

おうめさんは返事もせず、こそくと女のわきへやつてきて、其のうしろに小さくなつてすわつた。側へ來たのでその横顔を見て驚いた。おうめさんは昨夜の花嫁子である。今朝階子段で出遇うた花嫁子であつた。

いつの間にか高島田をくづして、束髪に代へたと見える。新らしい白のやたら縞に夏帯をしめて、髪には白のリボンをつけてゐる。おしろいを落したおうめさんの顔は、つやの

好い紅い丸顔であつた。

「おうめさんはこの繪はがきを見いしたかね」

と女は二三枚とつて、おうめさんの前へならべる。

「いゝえ、まだ」

と小さい聲で答へて、その葉書を指先きで一寸うごかしてみる。

私は、女の持つてきた勘定書に拂ひをする。

どう思つたかおうめさんは、伏せてあつた茶盆の茶碗をおこして、茶をついで恐はく私の前へ出してくれた。

停車場の鈴がけたましく鳴つた。

私は、茶をぐいと一息に飲んで、すぐ立つた、階子段を下りると、宿の女が荷物を持つて、私のあとについてくる。店には、男が二人まだ寝ころんでゐた。

「文治さん、大事なお嫁さんをたつた一人、二階に置いて、可愛さうがあせんか」

女が大きな聲で云つてあはははと笑つた。私はびっくりして振りむくと、此の時も煙草の煙を鼻から出してゐた若者は、目を細くして頭を左手で掻きながら、

「や、大きにお世話様。……ちやア之れから一番二階へ行つて、思ふ様可愛がツてきてやらうかね、ひひゝゝゝゝ」と笑ひ返した。

平泉村の女

一

中尊寺で有名な陸中の平泉村に「このゑ」さんと言ふ女がゐる。この女について、長塚節君と私との間に、未だ友人間にも知られざる面白い一條の物語がのこつてゐる。節君から私宛に來た書面の中に、平泉村の一少女「このゑ」さんに關しての書簡が前後三通ある。その中の二通は殆どそのための文通であり、一通は節君が大患後九州へ轉地前に病狀を報ずる文中に書かれてあるもので、抑も事の初めからは數年を経た後に於てまでも、同君がその少女のことを念頭から去つてゐなかつたのが明かにわかる。この三通の書簡が示す一の出來事は、同君の全集としては、かなり面白い一節をなすものと信ずるし、且つ之に就いては、書簡中にも明記されてある如く、私との間に或る應酬が行はれてゐる

のに基因するので、此の事がらを詳細に私が書くといふことは、同君の作風や作品を愛する人々にとつて大に興味を感ずべき事實と信ずるのである。

この平泉村の一少女のこと、及び節君の書簡をこゝに發表するについては、是非とも書かねばならぬ一の前話がある、この前話無しでは節君の書簡の有する内容も、女に對する同君の興味もまるでわからぬものになつてしまふであらう。

その前話と言ふのは、安房の清澄山に於ける炭焼の娘「お秋」さんのことである。

二

節君が、炭焼を思ひ立ち又醋酸石灰の製法を習はんと千葉縣安房郡清澄山の、東京帝國大學農科大學の演習林に出かけて一週間程その山中に滞在し、字八瀬尾の谷に於て實習に從事したのは明治三十八年五月のことであつた。その旅行の時の作歌は同年の雜誌「馬酔木」に發表されてゐるが、翌明治三十九年の七月の同誌特別號に、青果といふ同君としては珍らしい雅號を以て「炭焼の娘」と題した寫生文を掲げて、炭焼の娘なるお秋さんに就いてかなり綿密な同君の印象を記録してゐる。

私は其の頃農科大學に在學してゐたから、年に一二回は數週間を實地演習のために、清澄山の演習林に暮らし寄宿舎や旅館に多くの同窓生と共に起居してゐた。それで此の文章が馬酔木に出たときは、丁度學校を卒業して山林の官吏として、はじめて任地に赴く前後であつたから、節君の「炭焼の娘」は特に非常なる興味と、なつかしさを以て精讀し、そして其周到な描寫と眞摯な筆致に今更ながら敬服した。

そしてそれに出てくるいろいろの地名、たとへば八瀬尾、妙見越、樟の造林などは、自分達の生活にも親しいものであつたし、殊に同君の文中に在る八瀬尾の谷道の光景は眼に見えるやうに感ぜられて、大木の林下にそこ、咲いて居る胡蝶花の花など、實地に何遍か往復した私には、忘れ難い記憶となつて蘇つたのであつた。そして此の文章によつて、しほらしい美しい炭焼娘お秋さんが可なり激しい山中の労働にも屈せず熱心に從事してゐる姿を如何に快く又戀しく節君が眺めてゐたかと云ふことを知り得たのであつた。

節君は必ずお秋さんを思つてゐるに相違ない。かう考へて八瀬尾の谷の光景を自分の記憶に新たにすることはその當時の私として甚だ愉快であつた。私は「炭焼の娘」が馬酔木誌上に發表された年の六月初めまで清澄山中に一と月餘り滞在して實習をやつてゐた。

だから清澄に對する記憶にはまさしくいいものがあつた。然し八瀬尾の谷の炭焼は見に行つたけれど、お秋さんには遇へなかつた。お秋さんと言ふ名も、私にとつては節君の文章が初めてであつた。私は、そんな美しいしほらしい好く働く娘が八瀬尾の谷にゐて、

坂を登り切つたら流石に息苦し相に、胡蝶シヤガの花の疎らな草の中へ荷を卸した。脊負子を負ふために殊更小さな縮入のちやん／＼を引掛けたので體が何時もより小柄に見えた。手拭をとつたら顔が赤らんで生え際には汗がにじんで居た。うらかな日に幾らかの仕事をしてぼつとほてつて來た時は肌の美しさが増さるのである。白いものは殊更に白く見える。「炭焼の娘」より――

と云ふ風に節君の眼に止まり、その文章を成さしめて居やうなどとは當時全く思ひも及ばなかつたのみならず、私が八瀬尾の谷へ行つた一番終ひの時には、その炭焼小屋、即ちお秋さんの家は在るにあつたが人の住まぬ荒れた空屋になつて居た。なんでもお秋さんの父親は、その親類に立派な人が出來て、この山を去つて其の方へ行くことになり。遠地へ一家を擧げて移轉してしまつたといふやうな話を聞いた。

然し其の時はまだ「炭焼の娘」一篇を讀まぬ前だから彼等一家が八瀬尾谷を去つた事情や行く先などに就いては別段氣にもとめなかつた、只谷へ急な坂路をかけ下つた爲、一寸小休みしたくなつて、炭焼小屋の空家へ立ち寄つた時、其の家は疊も葎もすつかり取り去られ、床板の上に藁屑や木屑が煤にまみれて散らばつて居り、又、土間や家の入口の邊に陶器や其他の家具の破片が散亂して居たのを見たのであつた。節君の名文が詳細に叙述してある通り、此の谷は大洋近い山脈の、地味肥沃の土地にこんもりと茂つた樹々によつて瑞々しく覆はれ、谷の底には澄んだ河水が平らな岩盤の上をながれてゐる。谷のやゝ廣げた平地を選んで炭焼小屋と炭窯が築かれて居るのである。

清澄山の演習林に出かけることは學生達にとつては愉快な年中行事であつた。駒場の教室内に毎日ノートをこしらへてゐるよりは、山河を日々徒渉し森林に朝暮出入する實地演習の方が、何倍か楽しい仕事であるか知れなかつた。それだから三年間在學中には前後通じて、かなりの日數をそこに滞在する關係上、殊に旅行先といふ氣持もあるし、若い盛りシヤガの連中間には清澄山に於けるいろいろな話題が上級生から次へ／＼と繼承され、又新らしい事件や問題が生み出され發見されて行つた。その話題には堅い一方の事がらもあつた

し、又女に關する事がらも随分多かつた。それには旅館の女中も噂に上らないこともなかつたが、私達の時代には土地の名物として賣られてゐた羊羹屋の娘と云ふのが美人として學生間に評判であつた、それで羊羹屋へ毎夜學生達が三人四人と連れ立つて羊羹を食べに行つた。その家は羊羹しか無い家であつたが、飽きもせずそれを食べに行つた。けれど其の娘は殆ど學生達の居る場所へは出て來たことがなかつた。だから評判ばかりで實際肝腎の娘を見たと言ふ者は極く稀であつた。中には俺はものを言つたとか茶をついで貰つたとか云ふ者もあつたけれど、それは大抵他を羨しがらせる作り事に過ぎないのは見え透いて居るのでお互に誰も本當にはしないのであつた。

羊羹屋の娘に次で演習林の第三寄宿舎の在る四方木といふ部落の女の噂が屢話題に供された。四方木娘と言つて其地方でも美人が多いと謳はれた昔からの傳説を信じて、その方面へ測量實習などに掛ける連中は勇み立つて行くのも多かつた。それほど若い女に就て何かと口騒しく品評し合つた連中の間にも、節君の所謂炭焼の娘お秋さんは一向話題に上らなかつた。私は「炭焼の娘」を讀むとすぐ其のことを甚だ不審に思つた。ほんたうにそんな好い娘が居たらうか、文章を面白くするために何でも無い女をあゝ云ふやうに書

いたんではなからうかとさへ思つた。然し美しい娘が居る居ないは別問題として、あの文章は誠に面白い快い作であると思つた。それで娘の實否をたしかめることなどは全く考へもせず其儘二三ヶ月を経た。

それから私は官吏になつて任地に來た。すると、そこで圖らずも清澄山のお秋さんのことを審にする機會を得た。それは新任地で私は先輩の某に出遇ひいろ／＼話してゐるうちに、ふと清澄山の八瀬尾の炭焼のことが持ち出された。すると其の友人は、お秋さんを君は知つて居るかと言つた。私はすぐ節君を思ひ出して、それはかう云ふ風な美人であつたらうと云ふと、友人は、うん、君はあれを見たことがないのかと少しあきれたやうな顔をした。果して私達より上級であつた學生達の間には有名な娘であつたのである。お秋さんといふ娘は極く眞面目な女で、殆ど學生とは物を言つたこともない位だつたから、學生達も唯遠方から眺めて居ると云ふ態度であつたよと友人はおこそかな句調で言ひ足した。これを聞いて私は、節君のために喜ばしい安心を覺えたのであつた。

友人は私を羨しがらせる爲に、多少修飾した言葉を用ひてお秋さんのことを大に賞めた末、大に勿體振つた口吻で、お秋さんの寫眞を見せようかと言つた。

私は意外に思った。君がその娘の寫眞を持つてゐるなんて、ほんたうの事なら見せてくれたまへと言ふと、友人は笑ひながら戸棚をあけて、ごそくやつて居たが、やがて一枚の豆寫眞のやうな小さいビーオービーに焼いた素人寫眞を取り出して、それを私の手へ渡した。

見ると炭焼小屋を寫したもので、そこに五六人が立つて居り、其の中に女の姿が一人交じつて居た、これか、お秋さんは、と訊くと、うんそれだと友人は答へた。寫眞が小形なので、よく顔立はわからないが、さまで美しいとは思へなかつたけれど、然し山中の勞働者らしい所は少しも見えない整つた取りすました上品な少女であつた。服装は清澄山中の人々の着る山袴たつぽをはいて筒袖をつけて居た。私は寫眞を見ながら、友人に「炭焼の娘」の文章のことを簡単に話した。すると何う思つたか其の友人は、君にその寫眞をやらうと言つた。私は友人の厚意をよろこんだ。この寫眞は今でも私が所持して居る。

私はそれからすぐ、お秋さんの後日譚を出来るだけ詳細に認めて、久々の無沙汰詫びを兼ねて節君のところへ返書した。それには私が實見した八瀬尾の谷の人住まぬ小屋の光景を丁寧に書いた。そしてお秋さんが山を去つて今は寧ろ安易な生活を父親と共に他の國で

送つてゐるらしい話である、といふことも書き添へたやうに記憶する。

すると、私の此の書信を受け取つた節君の喜びは非常であつたらしい。すぐ返事がきた。八瀬尾谷の後日譚を詳細に知らせてくれた厚意を謝する旨がこまかくと記してあつた。私もお秋さんのことを通知した甲斐があつたことを喜んだ。この時の節君の書簡があるとは是非こゝへ載せたいのだが、いつ紛失してしまつたか、今は残つてゐないのは残念である。

以上は明治三十九年中の出来事で、これが平泉村の女に就いての、私の所謂前話なるものである。

三

越えて明治四十一年十月発行の雑誌「ホトトギス」第十二巻第一號に私の書いた「わたりもの」といふ短篇が掲げられた。それは其の年の夏私が秋田青森兩縣下へ旅行した時の見聞の一節を材料として書いたもので、歸途平泉に下車し中尊寺を見物したのが作の動機であつた。

當時の「ホトトギス」は寫生文派小説の全盛で、俳句側では漱石、虚子、碧梧桐、四方

太、鼠骨を始め他にも多数之れに執筆し、同じ根岸派の中でも和歌側として左千夫、節が之に對抗して寫生文や小説を勉強してゐた時代であつた。私も和歌の方の一人と言つた心持ちで、それをチヨイ／＼書きはじめて居た。

すると、此の「わたりもの」の出た月から二月後即ち十二月の十三日の日付で長塚節君から私へ宛て左の書簡が来た。

○

十二月七日夜水戸發急行列車に乗じ八日朝八時過平泉着。

高橋旅館といふみすぼらしき宿の貧相な男、客引に出て居る。中尊寺まで案内料十錢といふので頼む、此男の嫁が案内してくれる。ふと「わたりもの」を思ひ出したので此夏かく／＼のことで祝言はしなかつたかときき、有つたといふ、嫁は十六であつたらうときき、どうして知つて居るといふ。製板會社の前を過ぎて行く、晴天に雪がちら／＼散り来る。丁度マントのやうな形の引き廻しといふのを着た人々が炭をつけた馬を曳いて来る。一人で三頭は曳く。オイ其嫁はどうしたときき、一ヶ月計で加藤サンが會社へ出たあとで一切荷物を纏めて家へ通げて行つてしまつた。尤も嫁になる前から厭だといつて

居たのである。加藤サンは恐ろしげな顔をして居るが氣は悪くない、若い女房を持つたのだから非常に大事にして居たのだが年をとつて居るので一つは厭がられたのだといふ。幾つだといふと廿八であつたといふ。それで加藤サンは仙臺の製板會社へ行つてしまつた、それは外聞が悪いからだといふ。松並木へかゝると道は左へぐりと曲る。娘の家はどこだときき、並木の松の下で右側の一寸した百姓家がそれだといつた。表に赤い鼻緒の下駄が一足ぬいてある。娘のだらうといふとさうだといふ、加藤サンを嫌つて出て「このゑ」サンもめでたいことではないといふ、このゑサンといふのは娘の名であつた。娘の家のあたりから中尊寺の森がよく見える。

歸り途である。

オイお前其娘を呼び出して見ないかといふと嫁は碌な返事もしない。また娘の家の前へ来る、表の下駄はもうない、嫁は家に近づいたと思つたら、今日はといつてこのゑさんと呼んだ、ハイといつて障子のガラスの所から一寸顎から下を見せてやがてすつと開けて出た。十六の女の子に相違ない、嫁は行きに此の子は眼が少し近くて目を見る時には一寸妙な眼付をするといつた、果してさうだ、このゑサンは急に明るい所へ出たせいか

少し首を曲げて一方の眼を細くしたりして見る。血色のいゝ丸ぼちやな娘である。寒いので綿入をうんと着て細紐を一本締めて居る、何處までもあどけない容子だ。家の中では娘の母の聲で案内の嫁と頻りに何かいふ、母の姿は見えなかつた。縁側には麻が竿に掛けてあつて青首の大根が蓆に干してある。

腹が減つて居たのでそこへ宿へ歸る。雉子鍋で飯をくふ、同行の従兄は酒が好きなので快げに飲む、さうしてあの娘が可哀相でしやうがないといふ、従兄は或女の子にふとした出来心から子が出来た、さうして女の子が身分の違ふ處から忽ち別れさせられた、其子が妊娠したのも丁度十六の時で一昨年のことである。このゑサンといふ子が憎らしい顔をして居たら何とも思はないが如何にも愛らしいあどけない顔をして居るので餘計哀れに成つてしやうがない、このゑサンといふ名も可愛い名だといつて何だか泣き相になつた。従兄は酔つて爐の向でごろりと横になつて眠りかけた。晴天にも拘らず思ひ出したやうに雪がちら／＼と散りかかるといふ日であつた。

三時に平泉を立つて六時過に松島へ下車、十五夜の月を見て同所十一時半の急行で九日朝六時過水戸へ歸着。

○
小生所用のため水戸へ参り候處機關庫に奉職せる従兄の勧誘にて時間を見計らひ僅々一日の暇を以て中尊寺を見物仕り候。唯このゑサンに口をきかせなかつたことを遺憾と致し候。中尊寺は天下第一と存じ候、一驚を喫し申候、嫁の案内でこのゑサンを見たことも更に深き興味を惹き申候、このゑサンは大兄は御覽無かりしかと存候、清澄山の谷は大兄によりて後のことを知り申候、而してそれは作者が本人を見てあと訪ふ人は見ず、平泉村は其後のことを小生によりて大兄は知り可申道理、而して作者は却て本人を見ざりしこと却々面白き對照と存申候、中尊寺は此次復びゆつくり参る積に有之候、それは何年の後なるべきか、而してこのゑサンは其時如何の境遇にあるべきか兎に角並木の松の下に赤い鼻緒の下駄のぬいでありしこと、このゑサンが障子を開いて出て妙な眼をしたこと長く小生の記憶を去り不申と存候

先はつまらぬことながら大兄の興味を惹くに十分の事實と存候に付右申上候 匂々

十二月十三日

節

秋圃詞兄

これを見ると、節君が私の書いた「わたりもの」に興味を持つて居たこと、及び其の中に出てくる少女に對して或る印象を持つてゐたことが判つた。この書簡は節君一流の眞摯なる寫生文で文字も細字で丁寧に、薄い棒色の巻紙に書いてある。第二の〇印以下は少し文字が大きく且つ書體もくづして書いてある。

何はともあれ、私は自分の作に對して、こんな熱心な後日譚を聞かしてくれた同君の親切を甚だ嬉しく思つたと共に、それは此の書簡にもある如く、明かに「炭焼の娘」について私が後日譚を報じたのに對する應酬であつたことを知つた。この平泉村の女のことを書き記すために、前話として清澄山のお秋さんのことを詳しく述べた理由はこれで判然したることと思ふ。

但し節君は、私が、その女を文章の上では見たやうに書いてあつても、實際は見てゐないと思像し、兩者の對照比較にも亦一の興味を感じて居るらしいが、それは誤で、事實私は「わたりもの」の筋の通り、その女と實際ほんの少時間ではあつたけれど、同室の間近いところに座り、その手でついて呉れた茶を飲んだのである。

さて、私は此の書簡を受けとると、うれしさの餘り、禮狀を節君へ出した。そしてその

禮狀の中へかう言ふ意味のことを書いた。

寫生といふことの尊さは、しみじみと判つた。今回の「わたりもの」一件でよく判つた。それは外でもない、女の名である。私は其の名を聞く機會を持たなかつた。それで文章を書く時に、いろ／＼と彼女の名としてふさはしい名を考へたが、どうしてもしつくりと彼女に合ふ名を思ひ付かなかつた。それで不満足ながら、おうめさんと呼んで置いた。然るに今回貴兄の調査によると、本名は「このゑ」さんである。「このゑ」さんといふ名は正に彼女に唯一にして無二なる名である。このゑさんといふ名に於て、私は自分の見た彼女をすぐ思ひ出し、彼女の印象を深く呼び起すことが出来る。寫生の妙は、實に驚くべきものである。

かう書いて送つた。

それから一年経つた明治四十二年の十月二十八日付で節君から左の書簡を受け取つた。節君は、このゑさんに遇ひに、わざ／＼再び平泉村へ出かけたのである。私にとつては寧ろ意外であつた。——勿論前の書簡にも再び平泉へ出かける旨は記してあるにはあつたけれど——

拜啓

廿三日を以て歸郷仕り候、繪葉書髓に拜受仕り候、このゑさんには小生も全く失望仕り候、二泊の豫定も此がため果さず倉皇として淺蟲へ去り申候、赤い鼻緒の下駄は、もはや見る可らず、母なる人は見申候、このゑさんは母なる人に酷似致居候、縁といふもの奇なるはこのゑさんの上にも見るべく候、いまは從兄弟同士の夫婦に候由、小生は長き將來の幸福を祈り居り候、平泉村は早晩一篇を草すべく前便も申上候如く宿の妹に五串の瀧まで案内させ候ことによつて、今回の平泉村は徒爾ならず候

十月廿八日

節

秋 圃 詞 兄

平泉村を書く時は「わたりもの」一篇を拜借紹介可致候

この書簡中にある、前便も申上候云々といふのは、繪葉書に書いて旅中さし出されたものと記憶する。さて、これで節君が、如何にこのゑさんを中心にして平泉村に興味を持つて

みるかと明瞭になると共に、私は同君の筆によつて、描き出さるべき創作の出現を大いに楽しんで居た。が、それは仲々發表されなかつた、その中に私も亦いつの間にか同君の作品に、「このゑ」さんを見ることの楽しみを全く忘れ果て、しまった。

然るに、三年を距てた明治四十五年二月二十日付で、節君から左の書簡がきた。それは同君のために、悲しむべき出来事であつた。

拜啓

小生實は思はぬ悪疾を得て根岸養生院に療養致居候處七十八日にして漸く表記へ移り申候、あらゆるの歌を御覽被下候ならば疾に御存じのことと存候へ共平素の御詫にもと存じ書きつけ申候、今月一杯位滯京、一寸歸郷して更に九州へ轉地可仕心組に有之候昨年ほしみく〜と筆とるといふことも無之候ひしが、今年は是非共數篇を草したく腹案も有之候、平泉村の少女、大兄の所謂お梅さん實名このゑさんなど何時までたつても記憶を去り不申候に付き、赤い鼻緒の下駄なども現はれ可申候、されど急には參るまじく今年中の仕事として、大兄まで豫告申候。何も別に申上ぐることも無之候へば此にて筆止

め申候、西征の途次往復いづれかに錦地へもおとづれ申度と存居り候 匆々

二月廿日

節

秋圃雅兄 侍史

240

この書簡は私にとつて節君の病症の大患であることを知つた始めであつた。その頃は既に私は年來の「あたらぎ」に疎遠になつて、同誌を読むことも無かつたので、書簡にある同君の歌も知らず、勿論病症も深く知らなかつたのであるが、只誰れやらから長塚君が病氣ださうだといふ位の話聞いても、さ程のこととも思はず、つひ其儘御無沙汰のなりになつてゐたのであつた、そこへこの書簡が來たので吃驚したやうなことであつた。

それにこの書簡にも亦思ひがけなく、このゑさんが出てゐる。そしてその年の仕事として愈々何か平泉村を書くといふことを豫告してゐるのに驚いた。節君はあれ以來、平泉村もこのゑさんも全く念頭から離して居なかつたのであつた。

然し、節君が私へだけ漏らしてくれたこの起稿の豫告は、遂に實現せず終つた。私は自然讚美の歌人であり作家である長塚節君の詩興を、さほどまでに動した平泉村の一少

女に深い回顧の樂しみを持つてゐるため、同君の文章が實現しなかつたことを甚だ遺憾に思ひ、私へ宛てゝの前記の三通の書簡が、同君の平泉村を記述した一篇の創作とも思へて、極めて貴いものと信じて居るのである。

そして同君の第一文集が、「炭焼の娘」といふ集中の代表的名文を、書名に冠して春陽堂から出版され、其の文中にお秋さんについて、私が後日譚を書いて送つたことが、かういふ節君の詩興を引き起さしめる原因になつたことを喜んでゐるのである。

241

古代劇

今日は空晴れて伊吹風も吹かず、近頃にならない上天気である、洋服に草鞋ばきの、手靴を抱へた若い小役人がひとり、名古屋の町はづれを長湫街道の方へ歩いてゆく。

長久手村の岩作といふ大字の部落有林に、苗木植付の事に關し出張を命ぜられた青年は今日之れから四里ばかりの旅をせねばならぬ。此の街道には乗合馬車も通はぬので、人力車に乗つてゆくか自轉車を驅けるより外はない。併し青年は悠々と冬枯の儘の景色を眺めながら、極めて暢氣さうに土を踏んでゆく。

出來町といふのは名古屋市の最東端で、幅の狭い往來の兩側には、何となく憐れつぽい小家が列んでゐる。青年は左側の駄菓子店に立ち寄つて草鞋を買つた。二錢銅貨を小さい巾着から出して婆さんに渡しながら、鍋屋上野へゆくのは之れを行つていゝのかいと訊くと、ハイ／＼宜しうございますと答へる、岩作へ行くのも矢張その上野を通つて行

つて好いだらうねと念を押して質ねる。イワサキへ行くのは此の道では飽かんわといふ。青年は妙な顔をして靴から地圖を取り出して、呢と眺めてゐたが聽て岩崎ではない岩作へ行くんだから之れで好いんだらうと婆さんの説を反駁した。婆さんは態々教へてやつたのに云ふ事を聞かず却つて生意氣な事を云ひ返されて不思議さうな顔をしてゐたが、えゝ行けないこともないが二里位損をなさいませうと今度は氣のない聲で云つて、相手のズボンの大きな襷の當つてゐる所を眺める。襷は丁度膝頭の邊に當つて三角形をなしてゐる。多分山を歩いてゐる際木の枝か何かで突き破つた遺跡であらう。

青年は婆さんが自分の服の古傷を眺めてゐる間に、手早く地圖を八つに折つて靴に藏め其の儘匆々と低い軒をくゞつて外へ出る。二三軒ゆくと同じ側の家で、障子を明け擴げ朝日のかんかんと輝り込んでゐる疊の上に、まるで火の氣のない焜爐へ金網をかけ、切餅が二片寒むさうに置いてある。其の側に四つ許りの男の兒が胡座をかいて、呢とその餅を睨んでゐる。大方餅の焼けるのを待つてゐるのであらう。焼けたらお前にあげるから音なしでそこで番をしてゐると子供に餅を當てがひ、母親は裏の日向で洗濯でもしてゐるにちがひないと思ひながら、青年は一寸振りむいて男の兒の顔を見た。男の兒は目を見張つて熱心

に焼けてくるのを待つてゐる。餅は寒むさうに火のない焜爐の上に白い膚を曝してゐる。

何となくせゝこましい町筋を急ぎ足にぬけて愈田の中をゆく一本道へ差しかゝる。近く三河の山が見え遙かに木曾の御嶽が雪を頂いて餘寒の空に聳えてゐる。それから左へ美濃の連山の紫がかつた間に所々雪の置いた峯も交じる。此の壯大な行く手の景色に思はず目を移してゆくと、西の方には皚々たる伊吹の氣高い姿と勢州の山々の頂が南の空へと長く續いて、之れに日が映じて其雪も薄赤く輝いてゐる。青年は暫くあちらこちらと見渡して氣持よささうに立つてゐたが、又さつさと大腿に歩き出した。

此の頃は一向出張も命ぜられず毎日役所へ出て他の役人共と一所に、筆を取つたり紙に判形をベタ／＼押して許りゐたので大分意氣鎖沈しかけてゐたところが、今日は郊外を此の好天氣に大手を振つて行く事を得たので、いかにも愉快で堪らぬといふ譯であらう。

青年は細い口髭をひねりながら、松並木を通り過ぎると、向ふから肥桶をのせた荷車が五六臺程連続してやつて來た。此の荷車の曳き手は大抵二人で、その中一人は男、ひとりは女で、その又女が十四五位の娘であるのが此の地方の常である。東京市に出没する彼の葛西や練馬の連中に比べると、この方が遙かに詩的で俗臭近寄るべからざる名古屋市には

全く一異觀を興へる物であると豫ねて青年は信じてゐた。今出遇うた幾組も皆悉く一人づつ手拭を被つた十四五の女の子が綱を肩へかけて、元氣に話しながら車を曳いてやつてくる。娘の頬は皆眞赤である。青年は澄み切つた蒼空の色と此の頬の色とが好く調和してゐるから面白いと、繪描きめいた感を起した。

此の時うしろから不意に側をスイと抜けて自轉車が行つた。鳥打ちを被り幅の一尺餘もあらうと思はれる狐か何かの襟巻をしたインベネスの、半ズボン赤靴の男が乗つてゐる。見る間に一町餘りも距つてやがて曲り角で見えなくなる。青年はそれを見送つて相變らずさつさと歩く。

自轉車の見えなくなつた道の角に來たとき、一軒家の前で婆さんが紙の糊細工をやつてゐるのを見かけて鍋屋上野はまだ餘程ありますかと訊くと、上野はモウあんたが通つておいでました所なるといふ、あれが上野かいと青年は呟いて、ちやア岩作へ行くには之れから猪子石といふ所へ出てゆけばいゝんですかと尋ねると、猪子石はこゝから早や半里もないうづらが岩作といふはどうも知らんてなも、と婆さんは刷毛を糊箱へ投げ込んで相手を見上げる。

岩作といふのは長久手村の役場のある所ですがねといふと、ア、それならヤサコのことだよお婆さん、と奥の薄暗いところで若い女の聲がする。ア、やさこだて、もしやさこなら此の一本道を行つて頂戴すればわかりますがアと向を指す。ハア岩作はヤサコと讀むんですか有難う之れを眞直ぐに行けば好いんですなと、青年は中折を一寸取つて又歩きだす。岩作がヤサコになつたので道をまちがへて危く岩崎といふ方角違ひの所へ迷ひ込む筈を讀方が判明して仕合せであつた。それにしても随分と面倒な讀み方だと裏心に感じたと思へて、それから二三町程、岩作をやさこと讀む理由を、中學時代に習つた文法の轉音規則から説明してみようかと考へながら歩いてゆく。その中、猪子石といふ處も過ぎて山道へかゝる。陸軍省所轄地と書いた石標が澤山諸所にたてゝある。兩側は何の木もない禿山である。木のあるところには松のかじけた節瘤だらけの丈低い奴が、ヒヨロ／＼と屈曲して立つてゐる。

何といふ鳥だか二三羽高く啼いて空を翔つた。青年は首をあげて其の行衛を見てゐたがふと四五日前自分が立案した脚本の荒筋を思ひ出す。

時代は何でもサツと古く、奈良朝あたりにして、眞彦乙彦といつたやうな名の兄弟の若

者が狩に出かける。兄弟は其の國司の子供である。今日は翼の美しい鳥を射止めたものを勝ちと定め、狩競べをしようと思ふが云ひ出す、乙彦は兄と勝負を争ふのを好まず一度は之を辭したれど、云ひ出したら後へ退かぬ兄の氣を量り遂に引きうけて、二人は内山外山といふ左右の山へ別れ／＼に草をわけて入つた。この別れ際に二人の獵の區域は山の境の谷の流と極めてゆく。

次は谷の平らな所に一軒の茅舎がある。其家の主は白髪の老人で木を樵りに其の日も山へ出て家にをらぬ。娘の櫻兒といふのが一人で留守居をしてゐる。家には二羽の白鳩が飼つてある。兄弟もない獨ぼつちの櫻兒は此の鳩を何よりもなつかしい友と思つて此の年月ひたすらに愛育してゐる。一羽でも歸りの晚い夕暮れには戸の外に佇んで空を眺めて待つのが例である。今しも櫻兒が軒に出て鳩の一羽に餌をやつてゐる所へ、突然空から飼鳩が一羽バタ／＼と翼を射ぬかれて庭に落ちてくる。櫻兒は狂ふ許り驚いて馳け寄り、その矢をぬいて介抱したが、鳩は甲斐もなく死んでしまふ、櫻兒は鳩のなきがらを胸に抱いて泣いてゐるところへ、内山に狩りくらし乙彦が喉が渴いたから水を飲ませてくれと此の家に立ち寄る。櫻兒は乙彦が弓矢を手にしてゐるのを見て此人こそ鳩の仇よと思ひつめ、口惜

しさに返辭もせず、咽び泣きに益泣き悶える。乙彦は手持無沙汰に立ち乍ら鳩を射ぬいた矢を拾ひあげて、偕ては兄が此の乙女の飼鳩を射たと見えると心付き、兄に代りて詫びようと櫻兒に向ひ物を云ひかける。櫻兒は愈泣く。こゝへ老父が歸つて来て乙彦を見るや否や、驚き周章で、娘の無禮をたしなめる。櫻兒はたとへ貴人にしても、主ある飼鳩を射るのは情を知らぬ獸類にも劣つてゐる心だ。今日から自分は何を友に父の留守を暮さうかと哭く。こゝへ又急ぎ足に眞彦が獲物を捜しに來て鳩を無理遣りに取り去らうとする。櫻兒は狂人のやうに逃げ走り鳩を抱いて叫ぶ。眞彦はさらば縦し鳩を飽く迄我に渡さぬと云ふなら他の生きてゐる一羽を射殺して持ち歸ると弓に矢を番ふ、櫻兒は鳩を射るなら吾が身を射よと矢面にたちかかる。老父は驚きまどふ。乙彦は見兼ねて、其の鳩は一體どこの空を飛んでゐたかは知らぬが、此の乙女の飼鳩なら其の亡き骸は返してやつたがよろしからう、鳩を母とも兄とも戀ひ慕つてゐる山家の乙女は白い胸毛の紅に染んだ姿を見て早や其の心が狂うてゐるのだ。さア又山へわけ入らうではないかと和めると、眞彦は沸然として、鳩は谷間の空に飛んでゐたのだ、飼主があらうとも我は此の國司の世繼ぎであるから、空に舞ふ鳥なら總べて我が飼つてゐるのも同前だと一喝する。乙彦は、谷間の空に居た鳥なら

最初の定めを通り内山と外山との界であるから兄上の獲物とは云はれまいとやり込め、双方云ひ争ひ遂に眞彦が云ひ伏せられる。眞彦は乙彦の腰に名も知らぬ美鳥の獲物があるのを見出し、愈々腹立ちまぎれに櫻兒の手から鳩を強ひて奪うて去らんとする途端、ふと其の容色に心づき、急に氣を代へ、鳩は汝に返すから我と共に之れから吾が家へ來よと伴つて行かうとする。櫻兒は怖れて逃げまどひ思はず乙彦に縋る。乙彦は乙女のいちらしさと兄の暴虐に堪へかねて我を忘れ、兄よ此の櫻兒には穢がある此の乙女には夫があるぞと叫ぶ。偽を云ふな夫のある女ではないと眞彦が叫び返す。偽ではない斯くいふ乙彦の隠し妻であるぞと云ひかけたが思はず自らギョツとして聲をのむと、今度は櫻兒が涙に濡れた顔をあげて吾が夫は大和島根にこの和子の外は無いと云ふ。偕ては賤しい山賤の子と相見んために、常には朝狩と言寄せて父や兄をあさむき此の山家へ通ひをつたか、さまで柔弱なる汝と知る上は吾が遠つ祖の誼の通り、父に乞うて汝を家より追はむと眞彦は嗔りながら憤然と去る。白鳩がバタ／＼と立つて櫻兒の肩にとまる。櫻兒は思はず乙彦の右の腕に縋る。狩矢が二人の立つてゐる上の櫻の幹に發止とさゝる。落花狼藉。乙彦は櫻兒を胸に抱いてキツと向を見る。

といふ幕切れにしてはドウかしらんと青年は考へた。もう少し老父を使はねばならぬ、第一臺辭が仲々考へものだ。萬葉調でもぎごちなし淨瑠璃式でもげす張ると當惑した。何しろ六ヶ敷なアと青年は獨語を云つた。

此のやうな空想をして何時か道の岐れるところを行過ぎたが、二三間出かけて心づき、跡へ引き返して榜示杭はと四圍を見廻すと、枯草の中に臥てゐる角な石があつた。それを起して見ると左三州いぼみち、右やさこみち、南無阿彌陀佛、念佛供養塔と四面に書いてある。そこで右へ折れてゆく、青年は餘り足早に歩いたので少し汗ばんだ額を、風に吹かせようと帽子をぬぐ。長湫の古戰場は此の邊か知らんと四方を見廻すと、向うの角に村役場の表札が青年の眼にはひつた。

山にて聞いた話

一

炭材伐り出しの山林のことで氣拙くなつた庄造と角兵衛とは、ふたりとも仔馬の時の經緯を思ひ出した。

庄造の方は、今度のことさうだが仔馬の時も受け身の立ち場であつたから、餘計肚が治まらず、角兵衛の横暴な仕草を新らしく記憶から呼び返してひどく相手を憎んだ。こんどこそはどんなにしてもこつちの言ひ分を通して見せる。と斯う彼は自分に誓を立て自分を激勵した。仔馬の時は、見す／＼馬鹿にされると知りながら親族といふ義理で有耶無耶に事を済ませてやつた。それで角兵衛めが好い氣になつて、踏まうが蹴らうがぐうの音も出し得ない奴と俺をすつかり阿呆扱ひに仕腐つて、又も今度のやうな横暴を言ひ出したのだ。あゝいふ業つく張りに義理人情での交際は出来ぬ、こつちの言ひ分の通らぬ限りは一

歩も譲ることではない、金高にして見れば左程の違いもないのだが、その根性が氣に喰はぬ、鏝一文でも金輪際負けてなんぞ遣るものか。

斯う庄造は肚を極めた。そしてその當座は時々角兵衛のうす痘痕のある大きな鼻面を眼に浮べて一層の憎しみを昇らせた。

角兵衛の方でも、庄造の返辭を聞いた時には、ぐうと一途に癪にさはつた、話の判らねえにも程のあつたものだ。いくらまだ若いと云つても、もう三十づらをして此の位の分別が付かねえで良く今日が過ごせたものだ。俺が冬を目懸けて炭をやるのは年々のきまりだ、方々の炭材山を買ひに出ることも知り切つて居る筈だ。本來親族同志のことでなければ、初めから三割も四割も値切つて話を極めるべきものを、身うちの間柄だからこそ向の言ひ出した値段のほんの少しの愛嬌引きで大呑み込みに約束をしてしまつたのだ、そこは幾くも馬鹿でも判つてゐる筈だ。まして馬鹿どころか村の中でも何彼と人にも推され口の一つも表立つて利く人間ぢやねえか。……ところが買つた其の山といふのが、愈々炭焼を入れて察にかゝつて見ると、まるで話にならぬ木粒で、殊には向の言ふなりをそつくり信用して俺が現場を見なかつた裏澤の一條と來たら、やくざな雜木ばかりで棚敷も見込みの六

歩に足らず。それがため炭焼達が斧を入れて呆れ返り不承々々文句だら／＼で焼いた擧句が、こつちの算用から見るとまるで五歩に少々毛の生えた位の依敷しか出せなかつた。そこへ舊節季からの不景氣で炭の値は下がる、荷は動かさず、間屋の仕切もだらだら延びの始末だから有りの儘の話をして初めの約束の山代金の七歩といふ相談を出して見たまでのことだ。一も二もなくそれは氣の毒と引いて出るのが人情だ。まして親族の間柄だ。それを皆金でないからの苦情は、今更眞つ平ご免を蒙るなどと、妙に人を邪推した言ひ草で跳ね付け腐つた。それでも初めの約束に念が足りなかつたこつちの手落ちと思へばこそ勘辨にかんべんして二度も三度も足を運んでみたのだ。その擧句が鏝一文も引けねえと言ふ劍もほろゝの切口上だ。短氣な野郎とは知つて居たが、あんな慾ッ張りとはつひ氣も付かず、こつちがあまく付合つて居てひどい目に會はされた。

と斯う角兵衛の方でも其の當座しばらくは庄造のくり／＼した圓顔の圓い眼玉を思ひ出して、舌打ち鳴らして憎んだものだ。

このふたりの間に出てゐる「仔馬の時」といふのは——三年程前に角兵衛の家に飼つてゐる自慢の牝馬が素晴らしい仔馬を出した。丁度その頃庄造は仔馬が欲しくてさがしてゐ

た。それだから其の話を聞くと早速角兵衛の家へ出かけて行つた。角兵衛の自慢を散々に聞かされた上で、庄造は値段を極めて二人は機嫌よく厩の前で賣らう買はうの約束をした。そして庄造も笑顔で家へ歸つて來た。親族の間だといふので其の時別段手金は渡さなかつた。すると約束の日になつても角兵衛の方から取りに來いとふ沙汰がない。十日ほど過ぎて庄造が自分で金をふところにして出かけて行つた。行つて見ると仔馬がゐない。どうしたのかと尋ねると隣村の何某へ賣つてやつたと云ふ返辭である。短氣な庄造は赫となつた。角兵衛の言ひ條は斯うであつた。

「あの時の約束は、それほど固い話ではなかつた。それだから値段も相場並みより二三割好く買ふといふ相手が出てきたのでそれに渡してやつたまでのことだ」

庄造は此の言葉を聞くと一層煮え練り返つた。しかしそれでもぐつと肚を据ゑて勘辨した。今迄農事の上でも、山仕事の上でも、ついで角兵衛と金錢に係り合ふやうなことがなかつた。斯ういふ風な遣り口は、ひよつとすると角兵衛の癖かも知れぬ。此上もない悪い癖だ。が、しかしお互親族内輪の間柄だ、仔馬が出なかつたと思へばそれまでだ、これで氣拙くなるのも良い事ではない、まあ／＼勘辨してやれ、と彼はうんと踏みこたへた。そして

て歸りがけには戲談の一つも言ひ交して角兵衛の家を出た。——併しふたりの氣持には深淺の差こそあれ、矢張り其の事が、ちやんとこびり付いて居たのである。

今度の炭材山は庄造の所有を、角兵衛が冬仕事に買ひ入れる約束をし、炭焼をだいぶん入山させて仕事に懸つた。山が悪く豫定の炭の半分しか焼けず、焼歩が散々なので炭焼達からは苦情が出る、そのうへ不景氣で炭の値が廉くて話にならず、問屋の仕切が延び／＼と來たから、其の難澁の一端を助けたさに、まだ皆金にしてないのをさいはひと、山代の割引を角兵衛が庄造に懸け合つた。庄造はすぐ仔馬の時のことを思ひ出した。一氣に角兵衛の我儘を憎んだ。それで一も二もなく、ぼんと斷つた。斷られた角兵衛はむつとした。それでも二三度目を改めて頼みに行つた。そして兩方はだん／＼お互に憎しみを加へて行つた。中にも庄造は仔馬の時の言分を喉のところまで出しながら、さすがに口へは現さなかつた。角兵衛もその様子をちやんと見て取つて一層氣を悪くした。

庄造と角兵衛との間にもち上つた此の炭材山の一件は、それ切り方がつかず、又強ひて片付けもせず、庄造の方では態と殘金の催促も放りばなしにした儘半年の餘を過して翌年の夏も半ばになつた。それ以來二人は道で出遇つても碌そつぽ物も言はず膨れ面を互にそ

むけて通りすぎた。

それを庄造の無二の友達である兼助がひどく氣にして仲裁に立つことになつた。仲裁と云つても兼助は庄造から見ればぐつと萬事が弟分であり、庄造に較べて青年時代にもまるで子供扱ひにされた身分であるから、勿論鹿爪らしい口を利いて仲直りをさせようとは初めから考へても居なかつた。併しこの兼助は角兵衛の姪を女房に貰つてゐたので、自分の尊敬してゐる兄分の庄造が、女房の叔父と氣拙くなつて居ることは誠に情けない困つたことに相違なかつた。村の中で一番氣の合つた友達の庄造が、一件以來自分に對しても何處となく妙な氣持を抱いてきたやうに思はれるのは、とても堪らない苦しきさだつたのみならず、叔父の方も自分が庄造と元來仲好しだといふのを知つて居る爲めか、女房が遊びに行つた時にも従前とは違つてぶり／＼される話などを聞いてみると、愈々遺る瀬なく思はれた。

正直者の兼助は、思案に餘つて仲裁の事をもう一人の仲好しの安治と云ふのに相談してみた。安治といふ男はそんなことに係り合ふのは眞つ平だと言つて頭から斷つた。それで兼助は詮方せんかたなくなつたやうとう自分の口からび／＼／＼もので仲裁に立たして呉れと庄造のもとに嘆願して出た。

庄造は元來ひどい短氣な男だが、持つて行きやうによつてすぐほろりと折れてしまふ人間だつた。兼助がいつになく四角張つて口をもぐ／＼させた擧句、仲裁に立たせてくれると哀訴するのを聞いて、うん／＼お前の顔にめんじて一切お前に任かせるから宜しくやつてくれ、任かせると言つた限りには山代の割引も話の模様では先方の云ふ通りに負けてやつても苦情はねえ、と言ひ放つた。その言葉に兼助は泣き目立つて感謝した。まるで自分の犯した罪をゆるしてでも貰つた程に喜んだ。ありがてえ／＼を何遍も繰り返した。

そして間もなく叔父のところへ出かけて行つた。角兵衛の方は仲々話が進まなかつた。けれども割引をするといふお土産を持つての仲裁だから小一時間も話してゐるうちに、ただはつて居た叔父の顔も和やわらいだ。それで結局一割五分を引いて貰ひ、その日までの利息を角兵衛が出すといふことで萬事纏つた。

「こゝまで話が出来れば俺はもう役目がすんだやうなものだ。けれど之で唯金の取り次ぎをするだけでは、どうも矢つ張り庄さんとの間が元の通りにはならない、だから嫌いやかも知れねえが叔父貴が俺と一緒に足を運んでくれないか。たのむ、たのむ」

兼助が斯う言ふと角兵衛も今度の事は自體自分の方に無理が多かつたと知つてゐるか

ら、素直にこの申出を承諾した。

「よし／＼、お前と一しよりに行くとしよう。なアに庄造が其の氣なら、もと／＼親族の間柄だ。改つた挨拶なんぞ却つてお互に面白くねえから、此の話は一切お前に任せて、唯何といふことなく一杯やつて話でもして來るとしよる」と、久しぶりに笑顔を見せた。

二

三人が三人とも飲ける口であつた。中でも強いのは角兵衛であつた。其の角兵衛が一番ひどく酔つてしまつた。

三人は其の夜の顔合せに付いて皆内心に或る不安を持つて居た。が實際膝を突き合せて杯を手にする頃には、もうすつかり晴々した氣持になり、何のこはだりもなく大聲を上げて四方山話をしたり戯談を云ひ交したりして居た。酒が廻るに伴れて遂々仔馬の話が庄造の口から出た。兼助はひやりとした。

「角さんにはかなはねえ、何しろ頑固で我儘でぶつ通すんだから、俺達とはとても取り

組むことが出来ねえさ」

と言つて庄造が大聲に笑つたら、角兵衛も面目なげに頭を搔いてこれも高笑ひで應酬した。それで永らく不消化もたれて居た話も却つてすつかり綺麗に洗ひ流された形となつた。兼助は杯を手にしながら、つく／＼仲裁に立つた自分の今度の企ての良い事だつたのを喜んだ、そして庄造にも角兵衛にも今夜のさりとした態度を心から肚の中で感謝した。

角兵衛は今日家を出るときに、先日買込んだ煮干を大きな袋へうんと詰めて土産に持つてきた。途中の店で駄菓子を買ひ、それを袂に入れて來て、庄造の子供の顔を見ると氣輕に出して手渡した。そんなことが先づ庄造の氣を無雜作にやはらげたのである。

庄造は近所の川で漁つた鰻を蒲焼にして馳走した。これが又馬鹿にうまかつた。

「こんなうめえ鰻は食つたことがねえ、庄さんは料理屋より餘つぽど腕が上手だ。それに、鰻はこゝいらのを食つたらとても外ほかのは食へるものぢやねえ」

など、角兵衛は賞めそやした。そのうち庄造の女房や子供まで一處に座に加つて愈々話ははづんできた。さうかうしてゐる間に夜は大分更けて行つた。明け放してある軒から吹き流れてくる風は益々涼しく、月のない空には星が一面に散らばつて光つた。垣根の夕顔の

葉がしつとりとして山里の此の邊は既に夏も末のほの寒い露けさがあたりに満ちてゐた。

「もう歸らう。思ひがけない御馳走になつた」

と角兵衛は腰を上げた。庄造夫婦はまだ早い／＼と言つて眞實に引きとめた。

「何しろいくら馴れた道だとして二里近くはあるんだから、もうお暇することにすべし」と歸り仕度をした。庄造は思ひ付いて裏口へ行つた。そして太い竹筒を一本さげて來た。そして又勝手へ廻り、桶の中に入れてあつた今朝捕つたばかりの勢の好い鰻を三本その竹筒へ這ひ込ませた。

「角さん鰻を土産にあげるから持つて行つてくれろ。斯うして竹づつぽに入れたから大丈夫だ」

と言つて竹筒の口へ新聞紙を詰めに押し入れ繩で吊げよいやうに竹の頭をからげた。

「ヤア、そいつア難有い／＼。何よりの土産物だ。とても今夜の御馳走のやうにはうま／＼料理も出來めえが、……………」

角兵衛はそれを手につるさげて軒を出た。兼助も共に歸途に付いた。庄造の女房は提灯を二つ灯して來て二人の手へ渡した。三人とも此の上ない機嫌であつた。

三

角兵衛と兼助とは並んで五六町やつて來た。そこが道の二又である。兼助は酷くよろよろしてゐる角兵衛を家まで送つてやると言ひ出した。

「馬鹿云へ。酔つたつて道を迷ふやうな俺ぢやアねえ。一本道を迷はうたつて迷へるか。アハ、……………、や、おやすみ、又遊びに來てくんない」

角兵衛は笑ひながら提灯を左手に、鰻の入つた竹筒を右手に、さつさと行つてしまつた。

兼助は、

「おい。轉びなさんなよ。道は迷ひつこねえが、足許が怪しいぜ、好いか大丈夫か。アハ、……………珍らしく酔つたものだ」

斯う言つて後から笑ひ送つた。

角兵衛は一人になると急に足を早めた。上り坂を四五町くると熱くなつて汗が流れた。酔もそれと共に一層強く出た。彼は唯もう好い氣持で、今夜の鰻のうまかつたことばかりを考へて歩いた。舌嘗め磨りをして何やら獨言を言つたりした。角兵衛の家の近所は川が

細いので鯰しか居なかつた。だから鰻はさう度々口にはひらない。彼はこれを持ち歸つて皆に食はしてやれるのを喜んだ。彼はよろ／＼歩きながら、庄造も仲々良い男だ、本性は親切な男だ、唯あいつの疵は短氣なばかりだなどと思つたりした。

坂を登り切つた頃角兵衛はすっかり喉が乾いてゐた。ヒリ／＼と烙け付く様になつて冷たい水が欲しくて堪らなくなつた。彼は足を止めて山徑の左右を見廻した。そこは生憎峠の頂で清水の出る崖はなかつた。彼はこれから五町ばかり下つた所に良い清水の何時も落ちて居ることを思ひ出した。彼は坂をさつさと半ば走るやうに下つて行つた。手にしてゐる太い竹筒は相應に長いので、ぶらぶらと彼の膝にぶつかつた。提灯の方は氣にとめず竹筒ばかり大事にして、彼は時々それを目の上へ高くさし上げて見た。中に窮屈さうに入つてゐる三本の鰻のことを思ひ出すと妙に笑へてきて鼻を鳴らした。

角兵衛は酔つて居ても清水の落ちる崖の前でちやんと立ちどまつた。彼は先づ提灯を崖の上に高く出て居る木の枝にひつ掛けた。次に竹筒を丁寧に地上に置いて崖へと寄せかけた。ころげ易い竹筒をころげぬやうに注意は充分にしたのである。然し提灯を掛けた枝が高過ぎるので水の落ち口も、竹筒を寄せたあたりも、光は極めて鈍かつた。彼はチヨロチ

ヨロ云ふ快い清水の音を聞きながら、四つ這のやうな姿勢になつて顔を水の落ち口へ寄せて行つた。其の時彼はよろ／＼と三足四足よろめいた。水に濡れた苔の上にうっかり片足を載せたからである。彼はごく／＼と音を立て、水をたらふく飲んだ。そしてフウ／＼と息をはづませた。その後で又再び前の如く水を飲んだ。充分に飲んでから満足した顔を清水から離して彼は道の上に眞直に突立つた。その顔には水がだいぶん懸つて居た。それを腰に下げた手拭を取つて丁寧に拭いた、序にいが栗頭の汗もごし／＼と拭いた。

そして崖に寄せて置いた竹筒を手に取りらうとした。すると竹筒は何時の間にか轉げて居た。彼は周章でそれを握み上げた。ところがあいにくにもそれが逆さであつたので、中の鰻はその重みで竹筒の詰物にしてある新聞紙をすつぽり落してぬら／＼と出てしまつた。一本二本三本、それが一つになつて、べたりと地上に音を立てた。

「やツ、しまつた!!」

角兵衛は大きな聲で叫んだ。土に這つてゐる鰻を掴まうとした。鰻は三本思ひ思ひの方向へ逃げ出した。彼は大あわてでそれを追つた。が、何分暗さは暗し、相手が鰻のことであるし、その上酔のひどく廻り切つてゐることだから彼は忽ち三びきの行衛を闇の中に見

失つた。

「何處へ行つた〜」

彼は呶鳴りながら矢鱈に地上を搔いた。その中にやつと泥まみれになつた奴の尾だか頭だかが手に觸つた。

「占めたツ!!」

彼は斯う言つてぐいと掴んだ。が、すぐ抜けた。——又掴んだ。——又抜けた。抜けてぬら〜と清水の落ち溜る小さい水窪へ這ひ込んだ。彼は、

「こんちきしやう」

と呶鳴つて、その水の中へ手を入れた。

「糞ツ、いまましい奴だ」

角兵衛はすつかり立腹してしまつた。鰻を惜しむ心はいつか憎む心に變つて居た。どうしても取り戻して呉れるぞ、と彼は下駄をぬいで、其の水窪の中へ踏み込んだ。そして泥水を掻き廻してさがし始めた。

小さい水窪の片縁には雑草が覆ふやうに生えて居た。——その草のなかには大きな螢火

のやうな青い無氣味な光が二つづゝ二たところにいゝと静まつて居た。角兵衛はそんなものに少しも氣が付かなかつた。彼は唯力を込めて水の中を掻き廻し、次には其の草の中へ踏み込み、草の根元を矢鱈に掴んだ。

「痛てえ〜。ヤツ喰ひ付きやがつた!!」

彼は鰻が人に食ひ付くと云ふことを奇蹟に感じなかつた。彼は此の時ひどく酔つて且つ立腹して居た。それで喰ひ付かれた痛さの爲めに愈々烈火のやうに激怒して、憎くむべき鰻が今確に逃げ込んだ其の草の中を、散々に掻き搜つた。草の中で長いぬる〜したものを何遍か掴み何遍か取り落した。その度毎に、彼の手首は鋭い錐のやうなもので突き刺された。

角兵衛の此の闘争は尙しばらく續いたが、たうとう彼は根氣負けがして、よろよろと地上に腰をおろした。そしてふうふう息を吐いた。彼の兩方の手首からは血がだら〜幾筋か流れて居た。——草の中に光つて居た蒼い無氣味な四つの光は角兵衛の狼藉に會つて、もう其の時は消えてしまつた。

人氣ない崖の上に提灯は靜かに灯つてゐて地上にへたばつた角兵衛の蒼さめた顔をぼん

やりと照らした。冷たい風が峠の方からざわ／＼と木の葉に鳴り渡つた。

その夜、餘程たつてから漸く家へ歸り着いた角兵衛は、酷く苦んで夜明け方に死んでしまつた。

「鰻に咬ひつかれた」

と彼はその最後までうめき叫んだ。急を聞いて馳せ付けた庄造と兼助は驚きの餘り物も言へなかつた。家の者も近所の人々も唯あつげに取られてまご／＼する計りであつた。

しかし、村から呼んだ醫師の來る前に、それが蝮まむしの毒であることは人々に判断された。それでも致方はなかつたのである。

二軒目の家

一

舊道のくだり路にかゝると汗が乾いて、杉木立の暗い下を吹いてくる風は冷たかつた。彼はもう自分の郷里の村へでも入つたやうな氣持になつて、くだり路におのづから進むやうになる足を却つて控へながら悠々と歩いた。

停車場の在る所から、こゝへくる迄には二つの峠がある。第一の峠は此の街道でも有名なものであつた。峠には大きな隧道があつて、幅の廣い新道がうねりうねり山腹を傳つてゆく。ところ／＼に近道があつて、曲りくねる新道を横から直線的につないでゐる。旅人は大抵歩みよい樂な新道を取らずに、勾配の急な、雨水に洗はれた木の根や岩角の凹凸した、險しい近道をのぼりくだりするものであつた。従つて新道は荷馬車や自轉車が通るだけと云つてよい位である。

彼も、遙かに聞える馬子唄を耳にして、いつも近道の木の根や岩角に、一度二度草鞋の爪先きを痛めながらくだるのであつた。今日は雨あがりの道が粘つて、近道は随分くだりにくかつた。人が難儀をしてのぼりくだりする程の悪い道であるにも係らず、その近道をば炭俵や小荷物を着けた駄馬が通ふ。今日も、いかにも閉口したやうな風をして、馬が道の中で茫然として立つてゐた。急な坂道だから、馬の顔は上の方の岩角と向ひ合ひ、後脚は下の方の木の根のわきに危険さうに立つてをつた。馬は二疋連れであつて、頬冠りをした馬追は、後の馬から五六間後の方に之もぼんやり、巻煙草をのみながら休んでゐた。馬は「どうも滑つてこまる。何もこんな近道をやらないでも、車を曳いた馬のやうに矢張り新道を歩かして呉れ、ば樂だのに、馬鹿々々しい目に合はせやがる、人間め」などと其の巻煙草を咬へてゐる人間に不平を抱いてゐるらしく、鼻からフウ／＼呼吸を出してゐた。彼は馬の顔を氣の毒さうに見ながら、用心しい／＼滑らずにそこをくだつた。

其の第一の峠の新道をくだり切ると、道は幅の廣い新道と合して、左に谷川に沿つて少しづつづのぼる。この谷川は底の勾配が極くゆるやかであるから、豊かな水量は處々で丸い頭の川石に靜かな音を立てながら、悠々と流れてゐる。川の向側には、少し水田があつて

山の裾につゞいてゐる。十丁も行くと家の數三四十戸ばかりの部落があつて、茶店もあり、酒屋もあり、賣藥屋の看板なども見える。そこを出端づれると道は再び登りになつて、新道は右へ、舊道は左へ川沿ひにゆくことになるのであつた。

彼は、例によつて舊道をおもひた。舊道は川沿ひを少しゆくと急にのぼりになり、杉木立の間をのぼつて第二の峠にかゝる、秋の中旬であるから杉木立の葉も大分疲れた色に見えた。路に生え蔓つた雑草にも疲れた色が明かであつた。木立には春先きや夏の最中のやうな、若さや強さの代りに疲労と倦怠が明かに見えてゐた。路の草は春の芽生えから秋の結實に近づいた今爲すべき仕事を爲した飽滿が其の黄ばみかゝつた葉や莖の色にも見え、た。山の天然は秋に入つて、既に靜寂な中に斯うした或る疲労と飽滿とを示してゐるといふことを、彼は歩きながら心付いた。彼は此の邊を屢々旅行する。仕事の都合では三月に一度づつ往復することもあつた。であるから此の山路の景色も別段珍らしいとは思はなかつた。

雨あがりの薄日は、疲労と飽滿の天然を少し若返へらせてゐた。雨に濡れた葉はまだ幾分光つて、若々しい春の感じには及びも付かぬが烈しい夏の面影を秋の葉の上に盛りかへ

させてゐるやうに見えた。其のうへ照る薄日は妙に赤茶けては居たが、あたりの景色を少し賑かにして見せた。草の中では蟲が鳴いてゐた。チイ／＼と叫んで鳥が杉木立を駆けめぐるのも聞えた。

彼は洋傘を地につきながら、登り道をさつさと登つた。雲が折々厚く陽を覆うて谷間の舊道を暗くした。それでも彼は額に汗をにじませてのぼつた。彼は風呂敷包を克明に抱へて、ぐん／＼と草を踏み小石を蹴て足を早めた。——そして此の第二の峠をのぼり切つて今下り路にかゝつてからは、前に展開した高原的な盆地の、暮れかゝる宿驛の様を眺めながら、歩調をゆるめて悠々と歩いて行くのであつた。

「まづ、好し。これで峠も越したと。……今夜はどの部屋だな。一番か、それとも三番か。一番は廣くて好いが三番は少し閉口だ。混んでゐなければよいが。……此の前は知つた顔が二組も泊り合せたが今夜は誰れか来てゐるか知ら……」

など今夜の旅宿に關することを、彼は少し考へて歩いた。

其の宿驛は戸數百六七十戸有るか無しで、淋しい山間の町である。この郡内には他に大きい町もないのでこんな處にも郡役所があり、税務署があり、宿屋も三四軒あつた。藝者

も二三人ゐるといふので、怪しげな料理屋でポコン／＼と三味線の音がしてゐることもあつた。町のすぐ前にはこの地方での高い山が聳えてゐる。頂上が丁度鞍を置いたやうに横に連つてゐて、そこは草ばかりと見えて、遠くから仰ぐと何時も綺麗であつた。八合目あたりから麓へかけて杉木立がところ／＼黒く植ゑられてゐる。此の鞍のやうな山の麓と相對した一方には別段高い山はなくて低い丘が起伏してゐる。それで恰も高原の盆地のやうに見えるのであつた。秋の靜かな色は、此の山間の淋しい町には一層明らかであつた。

家々は大抵灯をつけて、ごと／＼夕飯の仕度らしい音をさせてゐた。小橋のわきの小料理屋も、ひつそりとして道沿ひの格子は障子が締め切つてあつた。その障子の紙の白いのも妙に寒い感じを誘ふのであつた。

彼はやがて、泊りつけの宿屋の前に来た。

「やア、今晚は。とめてくれたまへ」

斯う云つて中へ入つた。

宿屋は、山中の此の町に似合しからぬ廣い間口を有する二階建て、街道から見たところは仲々立派である。殊に入口は廣々した板敷が光つて、まだ木口新らしい柱や天井など、

確乎した頼もしい心地がした。

「お珍しうござんすわいな。さア、どうぞおあがりてお呉れませう」

今日は内儀が出て来た。さうして洗足の湯を運ぶやら洋傘を片づけるやらしてくれた。女中の案内で、彼は二階の一番座敷へ通された。廊下を通る時、客は二組ほどあるらしいと思つた。

成程、この土地へ来たのは一寸久し振りであつた。以前来たのは丁度半年ほどにもならう。入口でお珍らしいと内儀が聲をかけた筈だと思ひながら、部屋の中を見廻して帽子をかけたなり、包を床の間に置いたり、又入口の框で脱いで手につるさげてきた脚絆を衣桁にかけたりした。

彼は座蒲團の上へどかりと腰を卸すと、直ぐ洋袴下の紐を解いた。が、まだ其處へは浴衣が持つて来てないので、上着は脱がずに短衣のかくしから時計を出して側へ置いたり、ハンケチを出して眼鏡を拭いたりした。ところへ女中が入つて来た。

「いらつしやいませ」

二十六七の田舎臭く無い大柄な女であつた。そして言葉もこの地方の訛は少しもなく

程遠い、名古屋辯でね、ちね、ちした物云ひであつた。

「今日は、どこからお立ちかなも。……まア、それは。おえらうございましたなも。さアどうぞお茶を」

「風呂は、すぐはひれるかね」

「へえ、只今一寸。……あきますと申しますで、こゝへお浴衣を置きますから、どうぞ」

女中は茶を出して去つた。彼は妙に不快になつた。この宿屋には今まで女中らしい女中はあまり置いてあつたことがない。今夜の女は名古屋の大須あたりおほすの飲食店にでもゐさうな女で、こちらの出やうで粗野な言葉を使つたり馴々しい素振をしたりする類のものであると思つた。何だつてあんな女を此の家で雇つたらう、などとも思つた。そして洋服をぬいで浴衣になつた。浴衣と一處に縮入れの温袍ぬすらも添へてあつた。

「どうぞ。おそくなりまして申譯ございませんが、お風呂に。どうぞ」

と前の女が障子をあけて顔を出した。

彼は、膳を前にして、湯あがりの赤い顔をランプの光にてら、くさせて、旨さうに夕飯を食つてゐる。彼の前には、先刻彼を不快にさせた名古屋辯の女が給仕をしてゐる。一間隔てた座敷には客が來訪者と話をしてゐる。炭の値が上つたとか下つたとか、しきりに高聲で話し合つてゐるのが如何にも山家らしい感じであつた。その外は凡て甚だ静かで時折は前の小料理屋で鳴らすことのある三味線も今夜はまるで聞えない。

彼は、飯を食ひながら、湯あがりの好い心地で女を相手に話してゐた。今日の六里の山道は、彼にとつて丁度好い加減の疲労を與へてゐる。その疲労を湯に流して、少し張つた氣味の足を身體の重みで押しながら胡座まどろを組んで食ふ飯の味は仲々美味であつた。

「どうだい。こつちは、もう直ちやうに霜が降るね」

「さア、どうですか、すい分夜は寒いでなも。……冬は炬燵に當りづめだつて云ひますぜえも」

「君は、近頃きたんだね」

「えゝ、まだ、ほんの一月許り前にね」

女中は、こんな山奥へきたのをいかににも自分の沽券こけんにかゝるやうな顔をして、

「酷い處だなも」

と云つて笑つた。

「今まで、何處にゐたんだね」

「名古屋です」

「さうか、では随分淋しいだらうが、然しそんなにこゝは悪いところでもないだらう。人氣は好いしするからね」

「人は圓滿まろいでなも」

女中は鹿爪らしい顔をして頷いた。

彼は腹が満ちて好い心地になつてきた、併し此の家へつくと直ぐから或る物足らない感じを覺えた彼は、それを解決すべく此の時口を開いた。

「みかよさんは居るかい」

女中は一寸此の間が受けとれなかつた。

「こゝの家にある、……みかよといふ人だよ。知らないかね」

女中は思ひ付いた様子で云つた。

「え、知つてゐます」

「どうしたね、ゐるかね」

女中は一寸まご／＼してゐたが、やがて云つた。

「あの、病気で小谷村とかいふ村の親類へ行つて見えますわね」

「さうかい。病氣かい。それは悪いね。いつからかね」

「夏からださうです」

「どうしたんだい」

「……よく知りません。私は一寸お目にかゝつたきりなんですからなも。……大した病氣でもないでせうがなも」

食事が済んだので膳を引いて女は去つた。彼は好い心持でランプを見た。ランプに對しながら彼は、頬の赤い可愛らしい圓顔の「みかよ」の顔を一寸思ひ浮べた。「みかよ」といふのは此の宿の内儀の姪であつた。男のやうな眞黒い女中や鼻水を垂らしてゐるさうな子守娘のやうな女中などのお給仕より、みかよが來てお給仕をしたり寢床をのべたりするのが、彼には嬉しいことであつた。そしてこの邊の話聞きながら彼はみかよのお給仕で食

事するのが楽しみだつた。みかよは給仕をしながら、よく此の地の學校の運動會の模様や高鞍山たかくらやまの麓原の蕨取りの話をいかにも面白さうに語つた。みかよは寧ろ無口の方であつたが、併し話し出すと割合にいろ／＼のことを愉快げに語つた。其話も話す様子も無邪氣な快い旅の慰めとして彼を喜ばしてゐた。又裏庭で白兔に餌をやつてゐる姿や、柴の束たきを日に乾してゐる姿などを二階から見下したときもあつた。そして、そんな時には、淋しい山家の繪に赤い花を書き添へたやうな、靜かに澄んだ旅の興味に賑かな幼さを加へ得たやうな嬉しさを感じたのであつた。

彼は今夜、みかよの姿の見えない理由が明かになつたので、何となく物足りないながら別に其の病氣を案じてやると云ふでもなく、横になつて日記を付けはじめた。

やがて戸を吹く山風の寒い音をきゝながら、彼は臥床に氣持よい眠についた。

三

彼は其の翌日一日近所で用務を勤めた。終日草鞋ばきで山を登つたり、谷に下つたり、晴れ切つた秋の空から吹く氣持の好い風を満身に受けて、獨り面白げに木立を出入した――

—これが彼の爲すべき用務であつた。彼の友達として、人間の外に杉や檜の木立と、谷川と、そこに鳴く蟲や、そこらに生えた雑草や、いろ／＼のものがあつた。彼は終日手帳と鉛筆を手にして無言でこれ等の無言の友達を訪問した。無言の友達は到る處で彼を快く迎へて呉れた。前日舊道を登りながら其等の友達に、飽滿と疲勞の色あることを見出した彼は、自身に或る寂寥を抱いてゐた。彼は若い男であるが、もう二十八歳であつた。そして早くから獨立の生計を考へねばならなかつた彼は、月給取になつてから既に六年の間無言の友達と有聲の友達とを相手にして日々を暮してきたが、友達と自分との交情にはどうしても或る間隔があるのを知つてゐた。彼は自分を叱つたり勵ましたりした。

「これだけの仲の好い友達があるではないか、そして趣味の深い仕事をして働いてゐるのではないか、それなのに、何で淋しいんだ」

然し寂寥は容易に消えはしなかつた。旅に出てゐる時でも、家——家と云つても下宿住居であつた——にゐるときでも寂寥は彼を時々苦しめてゐた。然し彼は、そんな事で酒を飲んだり、又は茶屋の女を相手にして寂寥を誤魔化さうとはしなかつた。

彼は旅に出て一心に仕事をしてゐる時、いろ／＼の自然から生じる興味が、彼の寂寥を

消すのをよく知つてゐた。彼は旅中のそのやうな日を最も楽しいことに思つてゐた。此の日も彼は面白く楽しく終日山を歩き廻つた。暮方近くなつて川沿ひから街道へ出てきた。

彼は今夜の宿を取るために街道を少し歩いて又右へ小川に沿つて登つた。小川のほとりに一軒の瓦葺の家がある。この家も彼はお馴染であつた。小川のわきからアルカリ性の冷鉱泉が湧くので、其の家ではこれを風呂に焚いてゐた。で、温泉々々と此の邊の人はそこを呼びもするし、又幾分温泉宿といふやうな態度で入浴にくる人を迎へてもゐた。

夕暗の軒下に來た彼は、中を覗きながら聲をかけると主人夫婦はそれと氣付いて大に喜んで迎へた。この日は夕暮になつて前日より一層寒くなつた。湯が沸いてゐるといふので、彼は早速風呂場へ行つた。風呂場は新築の室で所々色硝子なども用ひた一寸温泉らしい感じのする三疊敷位の浴室であつた。彼は湯槽に飛び込んで長々と手足を延ばした。

「あゝあゝ」

大きな聲を氣持好げに勢よく出した。彼は思ひの外今日はくたびれたのである。大きな聲は狭い浴室の硝子戸や板壁に反響して靜かな谷間の夕暗に鳴つた。吊洋燈を提げて、この家の娘が浴室へやつてきた。

「おぬるくおありませう。焚きますから、どうぞ御悠りおはひりませう」

娘は斯う云つて洋燈を天井につると、すぐ焚口の方へ廻つた。焚口は壁の外にある。

娘は焚口で頻りにばちばちと柴を折つてはくべ、又火吹竹で吹き立てなどした。娘は十八丸の肥つた落付いた態度の、話は仲々する方であつた。少しぬるかつた湯は熱くなつてきた。彼は静かな暢長とした心地になつて、壁越しに娘と話し出した。

「大分久し振りで、此の湯にはひるんだよ」

「はい、さうでおありますね」

「久振りで来ても、この邊は少しも變らない。尤もまだ半年程だけ……野田町にも變つた事もないかね」

野田といふのは彼が昨夜泊つた町の名である。

「はい。別に。……昨夜は何處にお泊りましたかね」

「佐原屋に」

「佐原屋さんでおありましたかね。あすこは賑ひましたかね」

「静かだつた」

「佐原屋と云へば、みかよさん——貴君知つておいでませう。あすこの御内儀の姪子の……」

彼は湯槽から出て身體を手拭でこし、くやつてゐた。

「知つてゐる。病氣だつて話したよ」

「病氣？いゝえ。……病氣ぢやアないでござんせう。妊娠になつて、佐原屋の實家の方へ産みに行つておいでるんですぞね」

彼は手拭を動かすことをやめた。そして口早に訊いた。

「子を産みに？」

「はい、もう來月が臨月でござんせう」

彼れは驚いて、あきれて、茫乎した顔をして娘のゐる壁の方を見てゐた。

「眞實かね。それは」

娘は何か答へて、そしてほろりと笑つた。然し壁を隔てゝゐると、其の時娘が俯向いて柴をくべてゐたのと、云つた言葉は判然しなかつた。

「驚いたね。眞實なら……」

彼は續けて斯う云つた。

「眞まことに氣の毒でございます」

「お嫁に行つたんぢやアないのだね」

「はゞ」

「どうしたんだね、又そりやア……」

此の以前から湯は充分熱くなつてゐた。娘はそれでも尙、どし／＼と焚いてゐる。このやうな話には或る同情と或る反感とを應分に持ち易い年頃の娘は、聞き手の好奇心を咬るやうに、話をつゞけて行つた。

「みかよさんは騙だまされたんでござんせう。……あすこへ永いこと泊り込んでゐた白木師しろぎし（伐木業者のこと、方言）の番頭さんと心やすくなつて……」

娘はびし／＼と柴を烈しく折つた。

「あの子は兩親のない子で、佐原屋さんの御内儀ごしんぎを頼りにして、あすこにもう丁度、五年ほどゐたんでござんす。兩親がないから餘計一生懸命で働いてゐたんでしたわいな。それに今度のこと、佐原屋にもゐられなくなつて、小谷の方へお行きましたんですと

……氣の毒でござんすわね」

娘は次第に同情深い、老成なせた口調になつて斯う云ひ終ると靜かに立ち上つた。

彼は、入浴の快さに、話を聞いた咄嗟に動いた不快な——幾分妬ましいやうな思は、今は全く落ち付き拂つた憐みの情に代つてゐた。それで靜かな調子で云つた。

「一體あの人は幾歳かね」

「十七でござんせう」

「さうかい」

彼は湯槽から出た。さうして氣持好げに手拭をしぼつた。「可憐さうに」彼は心の中で何度もそれを繰り返へしてゐた。みかよの子供ッぽい顔を思ひながら。

四

その翌日、朝はよく晴れてゐたが、午後は曇つて夕刻近く雨になつた。この日も朝早く谷間の宿を立つて、例の洋傘と包とを手にして三里の道をとろ／＼木立に出入して、この日は午後三時頃宿屋に入つた。

その宿驛は、野田の町から見ると更に地盤の高い盆地に在つた。秋の色も此處には更に深く見えた。村は四方、山で圍まれ、中央に田が拓け、その田の間を街道が通つてゆく。街道の兩側は人家が連つて町並みをなしてゐる。山は多く草山で、谷間々々に黒い林が見えてゐた。

此の夜の宿屋は間數も少い、貧相な家であつた。そして小料理屋も兼ねてゐるので、若い女が二人亂次ない風で働いてゐた。彼は汚い暗い六疊間に通されて微臭い煎茶を啜つてゐた。夕刻まで村の人が二三人彼を尋ねて話しをしてゐたが、日の暮れ合に歸つて行つた。それと前後して隣の室に客が歸つてきた。

「まア、今日は早かつたなも」

「早かつたか。お前に會ひたいでなア。うは、うは」

下品な笑ひ聲が酌婦と其の客との間に交された。

「ちきに、お湯にしますから、待つててよ」

酌婦はばたくと草履の音を立て、彼の部屋の前を無遠慮に驅けて行つた。入浴は彼を先きにしたが膳は隣の方が先きであつた。その中に隣の客は酒が大分廻つたらしく、妙

に上調子の聲で喋舌り出した。

「もう、幾日におなりだね」

「さア、丁度五日だよ。……お邪魔ならすぐ立ちますよ。は、は、は」

「いやだよ、この人は」

酌婦は、斯う云つて、きやつくと馬鹿笑をした。

「實は當分御厄介になるかも知れないわけさ」

「さう、うれしいね」

「どうだか」

「あんた、さう旅に許り出て家で奥さんがさぞ氣を揉んでおいでだらうね」

「ところが、有難いことには獨身者さ」

「まア、ほんとかね」

「女房になりてがありませんサ」

など下らないことを云ひ合つてゐた。

彼は二日前の古新聞が其の部屋にあつたのを手に取つて拾ひ讀みをしながら、少し腹が

落ちついたら寝ようと思つた。床の間もなく額一つない中の間の六疊間に、騒々しい隣の話聞きながら長い秋の夜を斯うしてゐるのは堪らく厭になつた。然し外出しても仕方がないので、又繰り返へし新聞をひねくつてゐた。黒く煤けた天井の上では、鼠が時々人もなげに暴れ廻つてゐる。店先きでは他の酌婦が、馬方らしい飲み客と之も大聲あげて何やら騒いでゐる。そのわきで此の宿の子供が駄々を捏ねて、ぐずぐず文句を云つてゐる。臺所の方から何を焼くのか、酷く臭い香がぶん／＼鼻に入つてくる。彼は大分閉口してきた。

彼は今夜この宿屋に泊つたことを悔いた。今日はまだ足も疲れてゐなかつたのであるから、もう一つ先の村まで峠一つ越えれば好かつた。さもなければ戻つて前夜の谷間に夜を重ねれば好かつたなどと思つた。旅馴れた彼は、宿屋の待遇や隣室の騒ぎなどに對して氣にすることは此頃薄らいでゐるが、然しそれでも時によつては獨りむしやくしやと腹を立てることでもないではなかつた。

「野田の方へは行かないかね」

隣室では女が粗野な言葉を使つて客に話してゐる。

「久しく行かないよ。あすこは用なしさ」

「野田にも永らくおいでだつたかね」

「永いこと居たよ」

「何處に？太田屋かね。梅屋さんかね」

「うゝえ、佐原屋さ」

「さう。佐原屋に。あすこの家は立派だねえ。藝者も入れるの？」

「入れないこともないさ」

「大ぶんお遊びだつたらうね」

「野田ぢやア、ちつとも遊ばずさ。大まじめで音なしくして居たんだよ」

「どうだか。大まじめだなんて、旨いことを云つてるよ」

「野田にも、一寸三月許り行かない、何時も素通りでね」

「あんたは他の土地へは餘り行きなさらんの？」

「行くとも、今度こゝを済ますと、それから美濃路へ這入りますわけさ。來年は美濃から西の方が忙しいからね。當分此の方面は御不沙汰するわけさ」

わけさ、と云ふのが口癖と見えて、しきりにそれを連發して口早に斯う云つた。

聞いて居た彼は、ふと隣室の客が、みかよを不憫さうな目に合はせた男ではないかと考へた。——考へると、聽て確にさうだといふやうな気がしてきた。必ずさうだ。さうに相違ない、みかよは此奴の爲めに情けないことに今なつてゐるんだと信じる外なくなつた。そして激しい憤怒がむら／＼と胸中に湧いてきた。——みかよの子供々々した紅い頬、丸い頤が目に浮んだ。臨月前のやつれた青白い顔、櫛巻にした淋しい額が直ぐその後に見えた。にやけた手代風の男がみかよと語つてゐる不快な様も續いて現はれた。

「もう飯にしよう」

「あら、今夜は少いぢやアないの、もつと飲んだらどう？」

「いや澤山だ」

「儲けてゐなさる癖に、うんとお飲りなさいよ」

など女は戯談を云つた。併し其の職業が何であるかは二人の會話に想像し得られなかつた。けれども彼は、白木師の手代と確信して、それからは耳を隣室の話に聳てゐた。その中に客は一寸外出すると云つて出て行つた。

彼は隣室が靜かになると聽て、寢床をとらせてごろりと横になつた。すると不快も憤怒

も憐憫の情も何も彼も、段々淡々しい感じとなつて、程なく心地好げな鼾の主となつてしまつた。

五

同じやうな仕事に春秋を送迎して、彼はその後又三年を過した。同じやうな仕事をして同じやうな友達を依然持つてゐる彼には、今、妻があつた。妻に旅行用の手拭入れや脚絆などを準備させて、

「今度は六日目の夕刻には歸るよ、夕飯は歸つてから食べるつもりだからね……」

など云つて妻の手渡す包と洋傘とを受取つて門を出た。時には、妻が、

「お土産物のある處ですか。今度の山は」

と笑ひながら尋ねるのに、

「大きな自然薯でも擔いで來よう、あはとよ」

と彼が高聲で答へて出てゆくこともあつた。

彼は相變らず草鞋ばきで山や谷を登り下りしては行き馴れた宿屋に泊つて、宿の主人た

ちとも心安く世間話などをした。

二つの峠をのぼりくだりして、野田の町の佐原屋にも度々泊つた。或る梅雨の日であつた。野田の町を朝早く出立して二つの峠へ歸りくる途中、野田の町端れで、右に折れずに眞直に行つた。眞直は新道である。道が甚く悪いので舊道をやめて珍しく新道を歩いたのであつた。新道を少し来ると右側に板屋根の家が三軒續いて、その一軒目は馬の荷を扱ふ家と見えて、板材や炭俵が澤山軒下にも道を挟んだ向側の小屋にも積まれてあつた。道路に駄馬が多く立つてゐるので、其の鼻や尻の間を縫ひながら、彼は滑べる足元に氣を付けながら二軒目の家の前を通つた。

二軒目の家は明け放しで、板敷の上に藁を延べて女が二人裁縫をしてゐた。——その一人とふと顔を見合せた時、彼は其の女が「みかよ」であるのに氣が付いた。

然し果して眞實みかよであるかどうかには、直ぐ疑が起きた。彼は三軒目の家の前を通りながら振り向いて見た。その女は俯向き氣味で裁縫をしてゐた。そしてその髪は丸髷に結つてゐたのを見た。

彼は念のため、杉木立の曲り角で又振り向いた。今度はその家は板壁だけしか目に入ら

なかつた。彼は歩きながら、「みかよ」ではないか知らと、一町ほどそのことを考へてゐた。然し古い旅の「不快であつた隣室の客のこと」も、又「風呂を焚きながら耳にした娘の話」も、もう全く記憶から呼び起しては來なかつた。

林業技術者の感傷

去年大日本山林會の大會視察旅行で上州の温泉を、伊香保から四萬、川原湯から草津と巡浴した。

その川原湯のことである。――

吾妻川の溪谷は、折から紅葉で美しかった。奇岩怪石、聳立する岩壁、急傾斜の山腹、そこに茂りたつ木々の葉は、一樹一木異つた色に染んで居た。濃い紅の酣なのに隣して、まだ淡い黄葉があつた。朽葉色にちかい寂びた梢を道の上に擴げてゐる大木と竝んで、明るい黄橙色の葉を持つた若樹もあつた。もちろん常緑樹の榎や檜もそれらの間を點綴した。強い秋の夕暉が谿を挟む嶺の空から金彩の色を射付けて、それらの葉は、皆あかるく輝いて見えた。歩いてゆく道の上に、覆ひかゝる樹の葉は、陽を透してセルロイドのやうに光つて居るのさへあつた。常緑樹の翠色は紅黄の間を押し分けて其の位置を強く占めて

居た。それが更に雄大に奇警に景觀を誇張した。

谿を距て、向ふには嶂壁を爲して高い嶺が鋭く連亘した。それにも翠綠と紅黄とが參差し交互して居た。對岸の險阻は、夕陽を負つて居るので、概ね暗然としておも苦しく沈んで見えた。その色が又何とも言へず好ましいものであつた。

谿流の響は、道路の高さに従つて――寧ろ、溪流の深さに従つて、我が耳に遠近した。或時は潺々と或時は轟々と鳴つた。場處に依つては、碧潭が脚下に瞰られ、又奔流の岩角に激するのが窺はれた。

私はこの佳境を僅か半里にして側路へ岐れ去る由を聞き、物足らなさに嗟嘆した。一人旅ならば、足を停めて半日を此處に悠遊したいものを――。然しわが旅伴の一團百有餘名は、快き歩調を以て談笑賑はしく進み行つた。三町四町五町、佳景は轉開し奇峭幽邃な此の一卷の山水畫は、早くも其の軸を展じ盡さんとしてゐる。私は餘儀なく我が足を停めた。旅行團は忽ちにして前面の岩壁に沿ひて屈折し、長蛇のごとき一行の姿は、わが眼界から隠れた。私は唯一人となつた。

目の前に檜の古木が斜に怪岩の上に立つてゐる。その葉は悉く黄色である。陽が葉の各

片をつぶさにこまやかに照らしてゐる。私はそれを樹下から仰いで、澄み静かなる秋光を一葉一葉に嘆賞した。又一二町を歩いた。しかし一行は既に遠く去つて、今は全く一人取り残された身であつた。今まで多人數と共に歩いただけに、唯ひとりになつて見ると、秋の深さがひしと迫つてきた。私はひとり旅の寂しさ樂しさを十分に味ひながら、碧玉のやうな透き徹つた空を時々ふり仰いで紅葉を賞し又は暗色に沈潛した對岸の樹林を眺めて、一步一步を恰も名文の一句一句を嘆美する如くに味つて行つた。

其のうちにつり橋の前へ來た。見ると、橋の向ふの少しばかりの平地には、我が旅行團の一隊が集つて休憩して居る。そこで私も其の橋をわたりかけた。橋の中央で私は吾妻川の水をしみじみと瞰た。橋下を奔つてゆく清冽な水は、岨道を歩きつゝ遠く眺めたのと異つて、こゝではなつかしく親しいものであつた。——恐らく仙圍を流るゝ水も斯く橋下を過ぐる時、人間に對し愛慕を持つに相違ない。私は水聲に飽くことなく聞き入つた。

かくして、夕方ちかく着いたのが、川原湯の宿であつた。

その宿は頑丈な古い、いかにも此山間にふさはしい建物であつた。私は山林會の幹部諸氏と一つ室に入ることになつた。その部屋は二階建の母屋から鍵の手に出てゐる三室続き

の別棟であつた。山中の寂びた湯宿といふ感じは、母屋にも別棟にも庭にも到る處に満ち充ちて居た。太い柱、太い樺木、庇の深い屋根には、春の霞、秋の霧に濡れ乾きした木目の痕があり／＼と眼についた。

同宿はS博士、Y學士、M助教授、M技師それに私であつた。後からK技師と其實姉のK子夫人とが部屋の都合で此の室に一緒になつた。私共は連れ立つて浴室へ行つた。私はこゝの浴室は必ず好いであらうと想像した。踏み心地の安らかな板廊下を、二三度まがつて階子段を下りると、低いところに浴室があつた。果して浴室も、こゝにふさはしい好い光景を持つて居た。板壁も湯槽も落ち付いた古びを帯び脱衣場も甚だ簡素に、人々の脱いだ温袍や襯衣は丸めて板の間に置いてあつた。うすぐらい電燈が湯氣に籠められて、行燈のやうな、はかない光を放つて居た。丁度その時浴室には唯三四人が居たばかりであつた。私は湯の中に全身を浸したとき、つく／＼好いところへ旅行したなアと思つた。今日の吾妻溪谷の紅葉、晝の月、碧流、それらがあり／＼と眼に浮んできた。私はふと電燈を仰ぎ見て、これが行燈か蠟燭ならば一層調和するのにと呟いた。すると傍に入浴中のS博士は、此の私の感傷に快然として合槌を打つた。

私は全身を長々と伸ばし、得易からざる浴泉の一夜を此の上にも楽しめるだけ楽しまうと思つた。湯を出て、私はうす暗い廊下を通り階子段にさしかゝつた。其の時私の足の裏は、階子段の各段の縁が磨り耗らされて全く角が無くなり丸く滑らかになつて居ることを感じた。

私は部屋へ戻つてから、食膳に少酌の盃を銜みながら、今踏んだ古い階子段のことを思ひ出した。彼の階子段を登りくだりして浴室へ通つた永い年月の間の多くの浴客達を。この山間、殊に交通不便な時代、遠くは舊幕頃の多くの湯治客、農閑を見て骨休めに浸りにきた此の邊の百姓達を、私はいろ／＼に思ひ浮べた。

そのうちに興に乗じた私の感情は、ふと芝居めいたことさへも描き出した。——あの浴室の、ほの暗い行燈の火影に、不倶戴天の父の仇と計らずめぐり合つた若い侍が、首尾よく本望を遂げる——何かで讀んだことがあるやうな氣もした。私は直に即興の筋書を發表した。S博士を始め座に在る人々は、成る程こゝは背景が素敵だと賞讃し、微酔の笑聲は一しきり賑はつた。

斯うやつて旅興に陶醉して居るうち、私の胸裡に突然一の強い自省に似た感じが湧き上

つた。そして私はそれが爲めに少し暗然とした。——永い間、やつて來た山林技術者生活を離れて此の一年半、都會生活者となつた私は、いつの間にかひどく自分の生活に疲れて居たのである。——今夜、これ程までに深く旅の感傷に浸り切つてしまつたのは、全く其のために外ならない。

彼と老いたる林業技術吏

彼は、彼のうしろに歩いて居る老いたる林業技術吏の事を考へた。——深い杉林の下に曲折する小徑は、此の邊から少しく急峻になつた。それで、彼と、Hと呼ぶ老技手とは、やゝ足をゆるめて静かに登つて行つた。そこは四十五六年生の杉の純林で、數度の巧みな間伐は、山林を美しく整へて居た。直立した幹、飾られた樹冠。

其の樹冠には耀く陽が、ちら／＼と強い秋の光を揺がせて居る。然し登つて行く林の中には、ほのかながら暗さが全體に漲つて、地上に敷かれた岱赭色の落葉も、人の心を陰鬱に導いた。

彼は、杉落葉の軽い足觸りを感じながら、尙暫く自分のうしろに歩いて居る老技手の事から、思を離し兼ねてゐた。前夜、彼は宿屋の夕飯の時此の老いたる林業技術吏Hの口から、その身の上話を聞いたのである。晩酌が快く廻つたとき、聞き上手の返辭に乗せら

れて、Hは白味勝ちな胡麻鹽を撫でながら、自分の身の上話を竝べた。勿論それは自分の身の上話といふ形式でなく、自己の壯年時に於ける山林官吏數氏を主とした話題から入つたのであるが、話が佳境に進んでくると、Hは全く自己の回舊談に移してしまつた。酣醉に乗じて善人系なる老技手Hは自分の身の上を、まだ日も浅い交際の彼の前に、すら／＼と語り來り語り去つたのであつた。

今、彼は杉の落葉を踏んで山道を登りながら、ふと老技手Hの話しを思ひ出した。何の奇抜もない、謂はゞ平凡極まる或る一人の身の上話を——。

Hは何十年といふ長い間、山林技術吏として日々を過して來た。林業技術で糧を得る人間の爲すべき仕事は、何によらず大抵やつて來たのである。初めの二十七年程、Hは國有林の下級吏を勤めて居た。Hは徴兵にとられ、それがすむと同じ村の某の世話で、某の出で居る小林區署の臨時雇員に使つて貰ふことになつたのであつた。それを振り出しに、Hが勤めた仕事にはいろ／＼の業務があつた。苗圃の仕事、造林、伐木、測樹、測量、境界踏査。殆どやらぬ仕事はないと言へる。それから、まだ有つた。森林窃盜の搜索、その逮捕、訊問、犯人の護送。

それ等の仕事には、いつも皆上役があつた。上役の上にも亦上役があつた。だからHは何層かの上役達を経て命ぜらるゝ儘を神妙に従順に唯々諾々として働いたまでであつた。この二十七年の長い年月の間には、保護官舎の生活もした。小林區署で帳簿を前に、筆と算盤とを取つてばかり居た一年の歳月も含まれてゐた。又講習を受けるために大林區署の所在地へ行つて馴れぬ筆記に頭をなやました數ヶ月もあつた。雇員から判任官待遇に進んだとき、Hは得意の絶頂に上つた。生れ故郷の人々も、彼の親類達もHの噂を聞いて立身出世を喜び、口々に皆賞めそやして呉れた。その時は制服も改まつた。腰に付けた劍が歩くに連れて勢よく振れるのも、自分の昇進を祝すものゝやうに感じられた。

二十七年といふ歳月は、單調な生活に對しても、決して短かいものではなかつた。嬉しかつたことも覚えてゐるが、困却したことや苦しかつたことや、随分いろ／＼なことがあつた。苗圃に根切蟲が夥しく出て、苗木を殆んど跡方もなく枯らしてしまつた。その時Hは眼玉の飛び出る程上役から嗚り付けられた。そして始末書を書かされた上に、Hは自分の認印を捺させられた。Hは水牛の認印に印肉を付けながら、此の結果がどうなるかと怖れおののいた。然し、幸にもそれは何のこともなく済んでしまつた。もつとも、始末書を

Hから取つて行つた其の上役も、それまでに度々苗圃へ出張してきて根切蟲の發生を知つてゐた。碁の好きな男で、宿屋に泊つて毎晩夜半まで、村長や役場の書記や村の小學校の教員を相手にして勝負を争うて居た。そんな時に、碁を知らぬHが用件を持つて訪問しても、上役は空返辭をして一向氣には留めないで居た――。

根切蟲に次いで、森林竊盜の事件がHを悩ました。森林竊盜と云つてもそれは二三十本ばかりの杉の木を盜伐した事件であつた。が、その犯人が隣の小林區署の保護吏の手で擧がつて、且つ陳述が、盜伐の起きた林地の保護吏であるHの職務怠慢と云ふ結果に落ちて行つた。Hは根切蟲の事件以上に、此の盜伐の成行を心配した。其他、造林地の乾燥被害、風倒木、まだいろ／＼の出來事が、永い間にはHの周圍に持ち上つた。然し、こんな忌なことも――又は反對に面白いことも、年功を積むに従つてHに對してだん／＼大きい衝動も刺戟も與へないやうになつてきた。それで山林を相手とする職務上からの平靜と、日々の生活の平凡からHは忠實な勤勞を、それと意識もせず唯茫乎として送つて來た。妻が五人目の兒を産んだ冬、或夜Hは署長から官舎へ珍らしく呼び寄せられた。署長は、後進の爲に途を開いてくれ給へと氣の毒さうに言つた。規定から云ふとだいぶん困難だが特に

一級昇給することに僕が盡力するから其點は諒として呉れたまへと署長はHの返辭も待たずと言ひ續けた。月々二十圓にも足らぬ恩給で、これからどうして行かうかとその突嗟にHの眼前には五人の子供と、妻との顔が現れ出て、息もつまるやうに思はれた。家へ歸つて、まだ産褥を離れない妻に、そのことを打明ける時は悲しかった。

Hは、それから方々へ手紙を出した。今まで山林の官吏以外には知る人も少いので、従前永い間に知り合ひとなつた人達の中で、自分に厚意を持つてくれさうな誰れ彼れを物色し、俄かに就職の周旋を依頼した。十五六通出した手紙の中の一本が役に立つて、Hは程なく或る縣廳の林業係へ採用された。それから足掛け十年そのまゝに今日に及んでゐるのである。そしてその職務はHが一等卒で除隊して始めて小林區署の雇員となつた以來四十年も馴れ切つた山と樹木を相手とする仕事である。上役や同僚は——これも亦四十年來Hの交際馴れた官吏型の善良(?)な人達である。だから、Hは今の境遇に就いて何の不平も不満も感じて居ない。併し、それであるのに、此の卒直な忠實な老林業技術者Hの上に、最近どうすることも出来ない苦痛が現れてきた。これは多年「安易なる平凡」に馴れたHに、甚しい痛心の出來事であつた。根切蟲の事件にも、盜伐の事件にも、或は署長から辭

表を強請された時の心にも、數倍した根柢ふかい苦しみであつた。——それは、外でもない、山林を上りくだりする時に著しく感じる腰から脚へかけての疼痛であつた。

その疼痛は勿論病から來たものであつた。併し其の病に、Hは自分の老を明かに認めないわけにゆかなかつた……。

杉の落葉に低い足音を立て、靜かに登りながら、彼は、老技手Hの此の平凡な身の上話を思ひ出して居た。彼は、うしろに歩いてくるHの胡麻鹽髭と、薄い頭髮とを目に描いて、ひどく心を憂鬱にしてみました。——山に對し樹木に對し同じ様な仕事をして居るHと自分と、其の既往には少しばかり異つた點がある。然し其の將來の行程の上には！

二人の歩いてゐる杉の林は、この邊から檜を混じ、林齡も谷に近い部分よりは餘程若いやうであつた。勾配は少しく急になり、土層の浅いところには基岩が硬い塊を出して居た。黙々として登つて行くうちに、彼は、ふとこんなことに氣が付いた。——それは、老技手Hの、山林に對する愛着心である。愛着心の程度に就いてである。四十年に近い歲月、尊い人間一代の半ば以上をそれによつて送つてきた親しい對象に、執着する愛慕の心が、どれ程まで深くHに宿つて居るかと言ふ疑問であつた。

彼は、前夜一時間近くも綿々と既往を語つたHの言葉や態度や、その他平常のHのすべてを出来るだけ明かに心の中へ蘇らせてみた。Hが四十年近い山林生活は、本人の意識に於て米鹽を供しただけの資料に過ぎなかつたのではなからうか！

彼は、四邊が、やゝ明るくなつたやうに感じた。覆ひ被ぶさつて居た暗い憂鬱が消えてゆくやうに感じてきた。彼は、何気ない様子をしてうしろを振り向いて見た。老いたる林業技手H氏は息をはづませながら、左の手を腰にあて右の手は膝をたゞくやうに動かしていつの間にか彼よりは十五六歩も後れて一生懸命に登つてくる。

彼は、又起きてくる新らしい別の憂鬱を、強いて拂ふやうに、勢好く頭を回らして前方を眺めた。そこには、既に峠が来て、陽の光が真正面から彼の顔へ明るい樹間の輝きを注ぎかけて居た。

後記

本書は、私の舊著「山と人とを想ひて」及び「山にて聞いた話」の中から、特に山村に關係ふかい作品を選び出して、新一冊と爲したものである。書名は「山村の人々」と改題した。前著は、共に久しく絶版になつて居たのである。

作品掲載の順序は、執筆の年次によらず、私の感興のまゝに配列した。前兩書に掲げた自序を、ここに抜粋再録する。

この書は、山岳森林に於ける、余の旅行及び生活の間に得たところのものを主として收めた。それで、執筆の時代も何年かに互り、順つて余自身の境遇にも心持にも、又文體の上にも多くの變遷を有してゐる。この間、余は森林生活を本務とする林業技術官であり、後には市中營業の木工業者であつた。それで余にとつて、山岳と森林は今

までの生活上、寸時も離れることの出来ない対象であつた。余の書くものが其対象によること多きは、またやむを得ないのである。(中略)畢竟この散文集は、全體を通じて山林を対象とし背景とする余の記録であり創作であり思想である。

余の散文に就て、古くより厚意を寄せらるゝ高濱虚子氏が本書に序せられたことは、特に感謝に堪えないところである。

本書に掲ぐるところの平福百穂氏筆の挿畫二葉は、余にとつて忘れ難い思ひ出である。その一は、余の森林生活の出発地である安房の清澄山に、同君が旅行の際遙に余に宛てた通信の葉書で、他の一は明治四十四年の新年に、余の山めぐりの姿として畫いて贈られた賀状である。

(「山と人を想ひて」の自序)

都會に住み、都會の仕事のみするやうになつてから既に五年になる。山野林木の間に於ける生活から私はそれだけ遠のいてしまつたのである。それなのに、山野林木に對する私の愛着は少しもうすらがず、却つて増してゐるやうに思ふ。私がときたま筆を執ると、今以て山林を兎角題材にするのは、全くそのためであらう。山林のことを

書くのが私にとつては最も楽しく、又筆の運びもすらくとよいのである。

(「山にて聞いた話」の自序)

本書には往々林業や林學上の専門語を用ひた所もあるし、又、本書の場合に於て、山小屋と謂ふのは登山小屋ではなく、山中の炭焼や木挽の住む小屋であるなど、二三の附記を必要とする點があるかも知れぬが、それは省略する。

作品の執筆年次を明かにして置くことは、本書の性質上重要なので、左に之を詳記する。

- 山旅瑣事(大正一五・一一) 山と人を想ひて(大正六・春) 大森林の冬の夜(昭和
三・九) 山の移住者(大正一〇・秋) 山小屋の二人(大正九・夏) 瓜坊(昭和三・一
〇) 五郎助(昭和三・九) 野猪の角力場(昭和三・九) 月下の登山(大正一四・三)
落栗の徑(大正一四・八) 山林争議(大正六・夏) 鮎(大正一一・冬) 顔(大正一三・
四) 親切(大正一二・春) 茶の味(大正一二・春) わたりもの(明治四一・夏) 平泉

村の女(大正一・冬) 古代劇(明治四〇・二) 山にて聞いた話(大正一四・二二)
二軒目の家(大正六・秋) 林業技術者の感傷(大正一五・九) 彼と老いたる林業技術
吏(大正一四・六)

昭和十五年二月

秋園記

山村の人々
依田秋園

依田秋園著

山村の人々

定價壹圓六拾錢

印 者 檢 著

昭和十五年五月十五日印刷
昭和十五年五月二十日發行

東京市神田區神保町一ノ三四

發行者 新 島 章 男

東京市王子區神谷町一ノ四八二

印刷者 吉 田 了 太

東京市王子區神谷町一ノ四八二

印刷所 東京印刷株式會社

發行所

朋

文

堂

東京市神田區神保町一丁目三四番地
振替 東京二五九八三番
電話 神田(25)四五七七番

村の女(大正一一・冬) 古代劇(明治四〇・二) 山にて聞いた話(大正一四・一二)
二軒目の家(大正六・秋) 林業技術者の感傷(大正一五・九) 彼と老いたる林業技術
吏(大正一四・六)

昭和十五年二月

秋園記

依田秋園著

山村の人々

定價壹圓六拾錢

製本控

903

函

66

號

年

月

日

山村の人々

依田秋園

備考

1冊

朋文堂刊行圖書目錄

紀行・隨筆

山を 行くとともに(特製版)	高畑棟材著	定四六判 一五〇〇頁
同	同	定四六判 二四〇〇頁
同(普及版)	同	定四六判 二四〇〇頁
山の繪本(特製版)	尾崎喜八著	定四六判 三五〇〇頁
同(普及版)	同	定四六判 三五〇〇頁
同	同	定四六判 一三〇〇頁
雲と草原	同	定四六判 一三〇〇頁
こゝろの山	逗子八郎著	定四六判 二九〇〇頁
山と丘陵	中村謙著	定四六判 一三五〇頁
泉を聴く	西岡一雄著	定四六判 一三五〇頁
雲の旅	松井幹雄著	定四六判 二四三〇頁

研究

小品山岳漫歩	春日俊吉著	定新四六判 二七〇〇頁
山・スキー山は朗らか	村崎勝行著	定新四六判 二〇八〇頁
スキー山に立つ	坂部護郎著	定四六判 一八〇〇頁
スキー山最後の蠟燭	同	定新四六判 一三〇〇頁
雪と人生	高橋喜平著	定新四六判 一八五〇頁
奥秩父	全教著	定四六判 二六五〇頁
同	同	定四六判 二六五〇頁
大峰山脈と其溪谷	中川清太郎著	定四六判 二四三〇頁
六甲	竹中靖一著	定四六判 三四三〇頁
祖母	百溪祿郎太著	定四六判 一三五〇頁
高山植物の培養	河野齡藏著	定四六判 二二五〇頁
原日本高山植物圖説	同	定新四六判 二二五〇頁
同	同	近刊

キャンピングの指導 山口季次郎著 三五判 二〇〇頁
 改ハイキングの手引 時田 勇著 定五判 一〇〇頁
 積雪期登山 藤田 信道著 定四判 一三〇頁
 登山技術 高須 茂著 定四判 一七〇頁
 豊後國志 唐橋 世濟著 定四判 三三〇頁
 豊前志 渡邊 重春著 定四判 二六〇頁
 大分縣方言の研究 三ヶ尻 浩著 定四判 二二〇頁
 大分縣民話集 同 定四判 二〇〇頁

案内

山と高原の旅 中村 謙著 定四判 一六〇頁
 東京附近山の旅 分擔執筆 定四判 一五〇頁
 同 續篇 同 定四判 一四〇頁
 ハイキングの指導と案内 田中清夫著 定三判 一七〇頁
 東京 徒歩コース七百種 厚生省・健健會編 定四判 一三〇頁

創作・詩歌

新奥多摩溪谷 岩根常太郎著 三五判 二五〇頁
 改奥武蔵の山と丘陵 春日 俊吉著 三五判 一八〇頁
 上信境の山々 中村 謙著 三五判 一三〇頁
 京都北山と丹波高原 森本 次男著 三五判 二四〇頁
 比良連嶺 角倉 太郎著 三五判 二九〇頁
 上越の山と溪 中村 謙著 三五判 一八〇頁
 近畿の山と谷(改訂版) 住友山岳會著 定四判 一五〇頁
 増九州の山々(増訂版) 北田 正三著 定三判 二八〇頁
 餘暇市民ハイキング 菊地 隆之著 定三判 一四〇頁
 増補 東京附近温泉の旅 石村 新吉著 定三判 一四〇頁
 山の仲間 千坂 正郎著 定四判 一五〇頁
 マッターホーンの北壁を攀ぶ 山上 雷鳥著 定四判 一八〇頁
 旅と滞在 尾崎 喜八著 定三判 九〇頁

翻譯

山岳詩集 中西 悟堂著 新四六 一八〇頁
 歌山 稜 小宮良太郎著 新四六 二二〇頁
 アルプスの微風 山本 清一著 定四六 一〇〇頁

其他

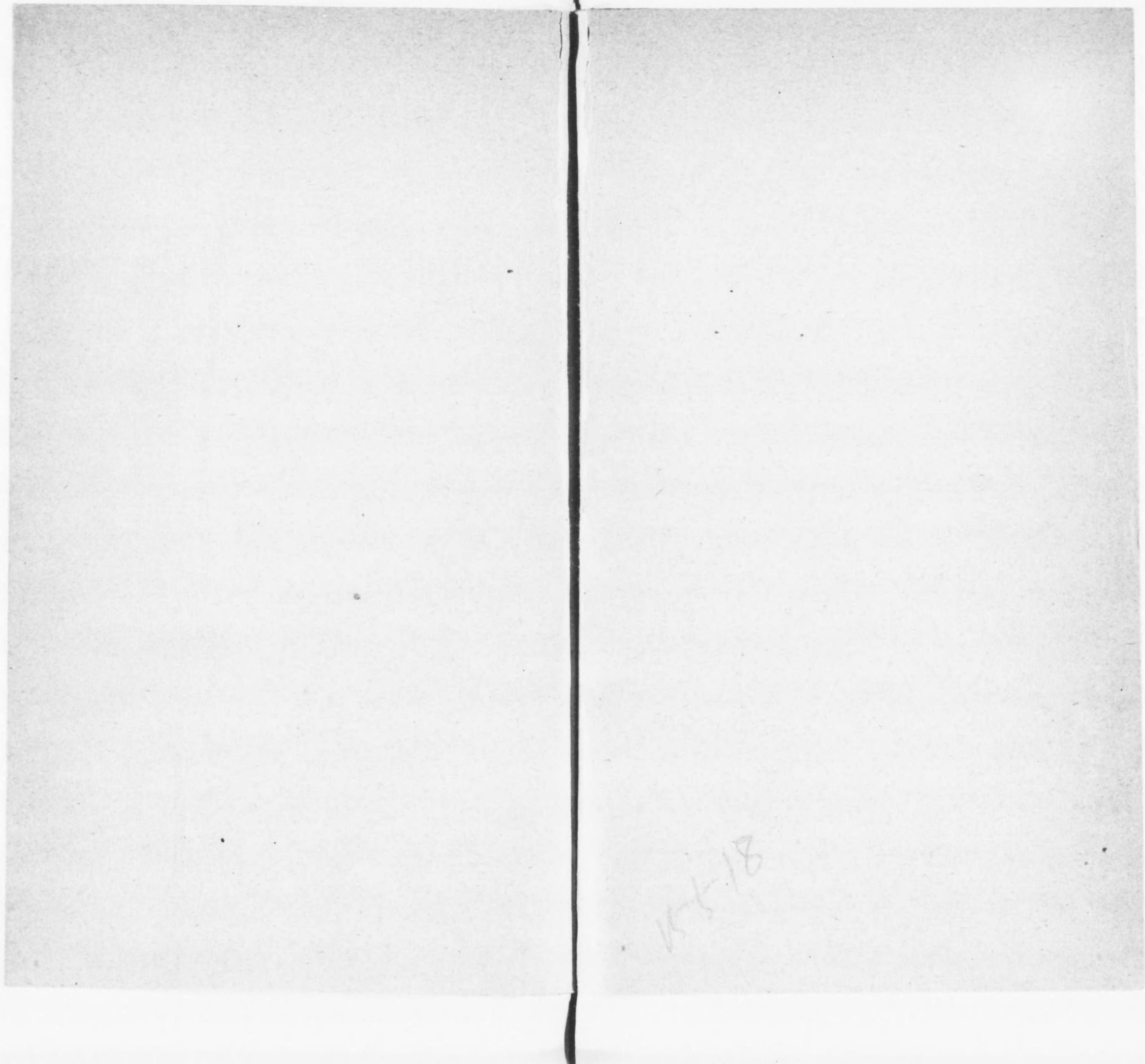
グンデルンゲ ヘルマン・ヘツセ 定新四六 一一〇頁
 山をめぐる行爲と夢想 エーリヒ・マイエル 定新四六 一六〇頁
 アルプス及コーカサス登攀記 A・F・マンメリ 定四六 二八〇頁
 山の魂 F・S・スマイス 定新四六 二八〇頁
 峰・峠・氷河 藤木 九三著 定新四六 二六〇頁
 スキー・スケート
 冬季登山とスキーツアー 分擔執筆 定四六 一四〇頁
 スキー日記 朋文堂編輯部 定小形 二五六頁
 日本スキー發達史 山崎 紫峰著 定菊 三四〇頁

わかり易いスキー術 鈴木 小島 六郎共著 定三六 一三〇頁
 三日スキー術 春日 俊吉著 定新四六 三〇〇頁
 最近のスキーテイニング 兩角 政人著 定四六 一三〇頁
 山のスケッチ 富田 通雄共著 定四六 一五〇頁
 山の手帖 朋文堂編輯部 定小形 二二〇頁
 オール・スポーツ 春日 俊吉著 定四六 一七〇頁
 九州山岳(第一輯) 朋文堂編輯部 定四六 一三〇頁
 同 (第二輯) 同 定四六 一三〇頁
 四國山岳(第一輯) 同 定四六 一三〇頁
 山と雪の受難者 春日 俊吉著 定四六 一三〇頁
 山の遭難生還者 同 定四六 一三〇頁
 山の初登攀物語 同 近刊 一三〇頁

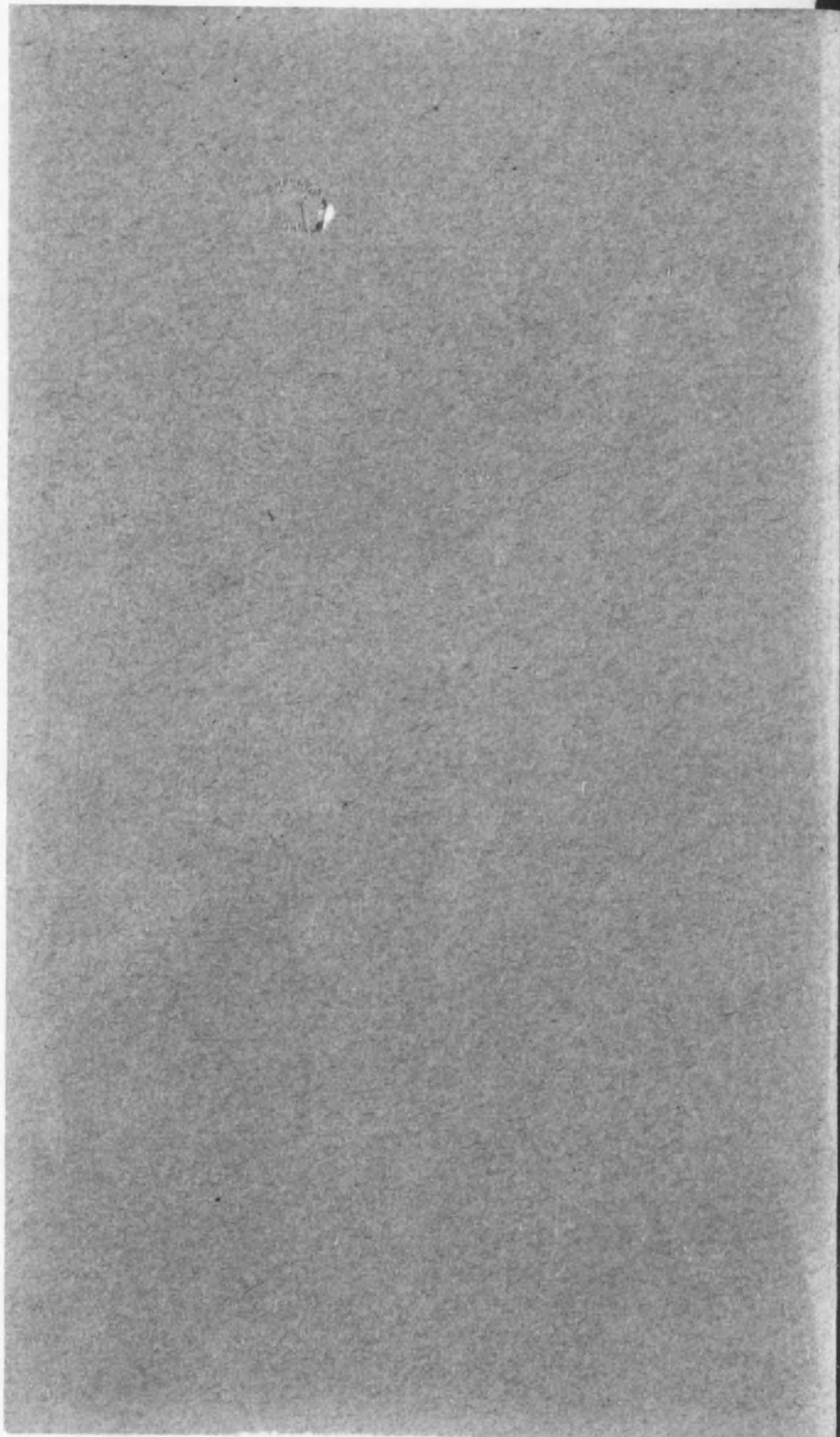
903
66

山岳文庫

ヒマラヤの山々上	諸家	新四六	二〇八〇頁
登山家に必要な救急處置	淺井 東一著	新四六	一〇〇八〇頁
岩・氷・ランブ	ジャン・コスト 高須 茂譯	新四六	一五〇六〇頁
山！	モルガン・タレル 荒井道太郎	新四六	一九〇八〇頁
路と路づれ	ヘンリー・ヘエク 八幡 黎二譯		
山を讀つた男	カール・ヘンゼル 千坂 正郎譯		
極地語彙	諸家		
冬富士廣瀬	深		
登山用具	諏訪多榮藏		
登山用語	分擔執筆		



15-18



朋文堂

¥ 1.60

畫

903
65

終

